

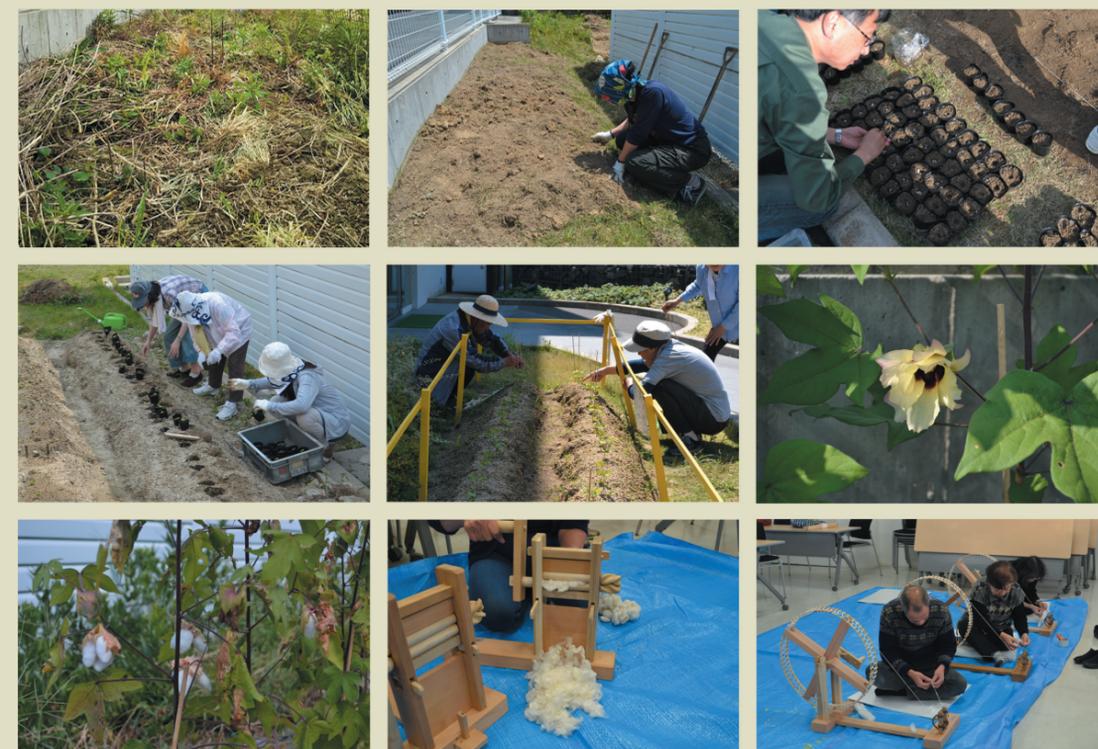
進  
化系アーカイブと  
旅  
するミュージアム

平成30年度事業報告書



進化系アーカイブと旅するミュージアム事業 平成30年度事業報告書

進化系アーカイブと旅するミュージアム実行委員会  
平成30年度文化庁「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」





進化系アーカイブと  
旅するミュージアム

2018



## はじめに

平成 27 年 11 月、大東市龍間（経寺地区）のだんじりが解体されました。そこで、過去に「だんじりを活かした地域共働事業」を通じて、共に被災だんじりのアーカイブ化に取り組んできた経緯もあり、奈良大学博物館・大東市立歴史民俗資料館・同館市民学芸員・大東市が共働し、龍間（経寺地区）だんじりのアーカイブ化と活用に取り組むこととなりました。

平成 29 年度には、その成果を大東市立歴史民俗資料館で展示することが叶い、来館者はもとより、だんじりがあった地域の方からも好評いただくことができました。そこで、平成 30 年度には、奈良大学博物館において、文化財を学ぶ学生へむけても周知できるようにと展示を行いました。その結果、1,260 名が来館し、43 名からアンケートの回答を得られました。アンケートの回答からは、50～60 代の社会人と 20 代の学生が多いことから、通信教育部や通学部の学生が多く来館し、文化財を学ぶ学生へむけた周知というところで一定のねらいを達成できたものと考えます。

さて、平成 29 年度事業を通じて、被災しただんじりが文化財として資料館に収蔵されましたが、「収蔵庫」そのものを改善することなしに、新しい文化財を受け入れることに限界があるというのが課題として浮彫りになりました。そこで、大東市を特徴づけるものをキーワードに収蔵庫整理を進めたいと、「河内木綿」をテーマとして平成 30 年度事業を行うこととしました。

市民学芸員とともに「河内木綿」の道具や歴史を学びながら、収蔵庫にある「衣」に関わる史資料を探し、アーカイブ化していく活動と、「河内木綿」の生産活動の見学や練習を行いながら、アウトリーチ活動を積極的に展開していく活動がはじまりました。アウトリーチにおいては、高齢者や障がいのある方など多様な対象を視野にいれつつ展開できるよう、学芸員や市民学芸員を対象とした研修を実施しました。

「だんじり」からはじまった本事業ですが、「河内木綿」へとひろがりました。しかし、収蔵庫にはまだまだ資料がたくさんあります。市民学芸員、あるいは学芸員それぞれがテーマを見つけ、古い収蔵資料から新しい活動を生んでいくのはこれらからです。

報告書をご高覧いただき、ご指導・ご鞭撻の程をいただければ幸いです。

最後になりましたが、本事業にご協力を賜りましたみなさまに厚くお礼申し上げます。

平成 31 年 3 月 31 日  
進化系アーカイブと旅するミュージアム実行委員会

#### < 趣旨 >

奈良大学博物館の専門性と大東市立歴史民俗資料館の地域性という相互の持ち味を活かし、デジタル・アーカイブの構築とその活用方法としてのモバイルミュージアムの検討を目的とする。大学博物館と連携を図りながら、市民学芸員とともに文化財のアーカイブ化を行う。このことにより市民学芸員を対象とした文化財の保存管理に関する講座を実施し、今後も市民とともにアーカイブ化を進める足掛かりとする。アーカイブ化された資料を活用し、地域の企業や団体とともにモバイルミュージアムを作成する。他分野と連携することで、来館困難者や障がい者に対しても「博物館体験」の提供を可能とする。デジタル・アーカイブは、博物館資料に関する情報だけでなく、モバイルミュージアムにおいて行う博物館資料を活用した「博物館体験」についての情報も公開していく。これによりデジタル・アーカイブがモバイルミュージアムで持ち運べない博物館資料についての情報提供を行い、モバイルミュージアムがデジタルアーカイブを普及させる橋渡しとなり、博物館の保存機能と教育普及機能が連環する仕組みをつくる。

< 組織 >

委員長	笠井 敏光	前大東市立歴史とスポーツふれあいセンター名誉館長
副委員長	坂井 秀弥	奈良大学教授・奈良大学博物館館長
委員	小山田 宏一	奈良大学教授・奈良大学博物館学芸員
委員	藤本 悠	奈良大学講師
委員	中村 義之	大東市立歴史民俗資料館市民学芸員連絡会会長
監事	黒田 淳	大東市教育委員会生涯学習課参事
事務局長	中屋 龍悟	大東市立歴史とスポーツふれあいセンター副館長
事務局員	武井 二葉	大東市立歴史民俗資料館館長
事務局員	大畑 博嗣	大東市立歴史民俗資料館副館長
事務局員	甲斐 規予子	大東市立歴史民俗資料館学芸員
事務局員	森井 綾乃	大東市立歴史民俗資料館学芸員
事務局員	森田 拓馬	大東市立歴史民俗資料館学芸員



## 進化系アーカイブと旅するミュージアム



ア-カイブくん

資料の収集から殺虫処理、クリーニング、調査に至るまでの過程で得られた情報を「現場」で記録していく「進化系アーカイブ」



旅ミュージアム

アーカイブが完了した資料を館外で展示・教育普及し、アーカイブと資料の活用のあり方を問う「旅するミュージアム」

平成 29 年「よみがえれ！だんじりの龍」展展示パネルより

## 事業概要

**デジタル・アーカイブ**の構築においては、既に収蔵資料のデジタル・アーカイブとその公開を行っている奈良大学博物館に倣い、大学教員の指導を仰ぎ、市民学芸員と学芸員がだんじりに関わる文献資料、彫り物のデジタル・アーカイブを完成させる。また、市民学芸員がアーカイブを作成する過程で、自身が取り扱った資料について、展示として公開する。

**モバイルミュージアム**は、市内の明星金属工業株式会社等の製造メーカーとともにキットを開発し、川村義肢株式会社といった障がい者支援を行う企業と連携し、誰もが楽しめるユニバーサルなものとする。これを地域の病院や高齢者施設といった施設において、実証実験を行い、参加者からのヒアリングを行う。

デジタル・アーカイブには、アーカイブ化されただんじりに関する情報だけでなく、モバイルミュージアムで展開した「博物館体験」に関する情報も公開していく。



ア-カイブくんと  
旅ミュージアムちゃん

# 目次

	凡例
P02-03	はじめに
P04-05	趣旨 / 組織
P06-07	事業概要
P08	目次
	<b>第1部 進化系アーカイブ</b>
P12-17	第1章 「河内木綿」に関わる民俗資料の整理とアーカイブ化 甲斐 規予子
P18-19	第2章 「河内木綿」に関わる文献史料の整理とアーカイブ化 大畑 博嗣
P20-27	第3章 文化財撮影における近赤外線カメラの可能性 藤本 悠
P28-29	第4章 市民学芸員と学ぶ「モノづくり」の歴史と收藏棚づくり 森田拓馬
	<b>第2部 旅するミュージアム</b>
P32-41	第1章 市民学芸員と作る「河内木綿」の旅 森井綾乃
P42-75	第2章 アウトリーチをテーマとした学芸員研修 甲斐規予子・森田拓馬 / 佐藤 優香 / 西谷 美紀 / 宮元 正博 / 大畑 博嗣 / 日高 昭子 / 北村 美香
	<b>第3部 展示とシンポジウム</b>
P78-83	第1章 企画展1「地域のくらしとまつり よみがえれ! だんじりの龍」 坂井秀弥・小山田 宏一
P84-87	第2章 公開講座 + 市民学芸員木綿活動報告会「織りたい!! -大東の河内木綿活動-」 森井 綾乃
P88-89	まとめ 笠井 敏光
	謝辞





## 第1部 進化系アーカイブ

大学博物館と連携を図りながら、市民学芸員とともに文化財のアーカイブ化を行った。そのために、市民学芸員を対象とした文化財の保存管理に関する講座を実施し、今後も市民とともにアーカイブ化を進める足掛かりとした。



第1章では、市民学芸員とともに行った木綿にかかわる民俗資料の整理作業やデジタル・アーカイブの構築について報告する。大東市を特徴づけるテーマの一つとして「河内木綿」をとりあげ、市民学芸員とともに近隣の博物館への見学や外部講師による講習を通じて、理解を深めるところからはじめた。

第2章では、市民学芸員とともに行った文献史料の調査やデジタル・アーカイブ化について報告する。まず、翻刻の作業を行ったのち、アーカイブ化するために写真撮影・計測の作業を行った。

第3章では、アーカイブ化していく情報の一つとして、資料に含まれる文字情報に注目した。特に、民俗資料にみられる墨書の撮影に対して、手づくり近赤外線カメラが有効かどうかを検討した。

第4章では、市民学芸員と行った「モノづくり」の歴史を、作ることで学ぶ取り組みについて報告する。

## 第1部 第1章

### 「河内木綿」に関わる民俗資料の整理とアーカイブ化

甲斐 規予子

大東市立歴史民俗資料館

#### 1. はじめに

本報告では、大東市立歴史民俗資料館（以下、資料館と略す）の市民学芸員との取り組みについて報告する。昨年度の「進化系アーカイブと旅するミュージアム事業」では、学芸員と市民学芸員によりだんじりの彫り物の整理とアーカイブ化を実施した。この活動を下敷きに、新たなメンバーを迎え、今年度は「河内木綿」に関連する資料に焦点を当て、アーカイブ化を進めることとなった。

今年度の事業のキーワードが「河内木綿」となったことは、民俗資料のアーカイブ化を進める上で条件が合致した。その理由は、資料館の民俗収蔵庫を再整理するにあたり、全ての資料を民俗資料分類に基づき分類し、再整理した上で、「衣・食・住」のうち、「衣」の項目に属する資料群からアーカイブ化に着手したい、と考えていたからである。ただ、闇雲に「衣」の項目の資料全体に手を付けると、数が膨大であるため一年という期間では時間が足りないため、さらに項目を細分化し、「衣」の中でも特に「河内木綿」に関係していたと推測される資料に限定し、アーカイブ化を進めることとなった。

#### 2. だんじりの彫り物の整理とアーカイブ化（前年度報告）

昨年度には、伊達仁美教授の指導の下、他館収蔵庫の視察や、資料の殺虫処理についての講義と実演、だんじりの彫り物のクリーニング作業、資料撮影、棚への配架作業を実施した（写真1、2）。

#### 3. 近隣の「河内木綿」を扱う博物館の事例見学

「河内木綿」に関連する資料のアーカイブ化に向けて、まずは資料を理解するために、近隣の「河内木綿」について展示を行っている館の見学へ市民学芸員と共に行き、勉強会を実施することにした。

##### (1) 大阪商業大学商業史博物館の見学会

（大阪府東大阪市御厨栄町4丁目1-10）

実施日：5月22日（火）

目的：河内木綿の道具や歴史について学ぶ

参加人数：8名

##### (2) 八尾市立歴史民俗資料館の見学会

（大阪府八尾市千塚3丁目180）

実施日：6月21日（木）

目的：河内木綿の道具や歴史について学ぶ

参加人数：14名

#### 4. 資料理解のための外部講師による講義

「河内木綿」に関連する資料のアーカイブ化に向けて、民俗資料の分類について学ぶことと、見学会で得た資料の情報についてさらに理解を深めるため、外部講師を招き講義を行っていただいた。

##### (1) 民俗資料の分類についての講義



写真 1. 整理前のだんじり / 2. 整理後のだんじり / 3. 木綿用具講義 / 4. クリーニング

実施日：7月24日（火）

講師：奈良県立民俗博物館 主任学芸員 溝邊悠介氏

参加人数：10名

内容：民俗資料の分類について、分類の考え方や項目についての解説

## (2) 木綿織りとその用具についての講義

実施日：8月28日（火）

講師：奈良県立民俗博物館 学芸課長 横山浩子氏

参加人数：18名

内容：河内木綿の歴史についての文献紹介や、それぞれの道具の解説（写真3）

## 5. 民俗資料のクリーニング

9月25日には、収蔵庫で木綿に関係すると推測される資料の搜索を、市民学芸員とともにいった。資料館の所蔵資料は、平成24年に資料館が現在の施設に移設されて以降は、資料の配架場所を定められていない状態だったため、実際に資料が収蔵庫内のどこに配置されているかを詳細に把握できていない状態であった。

そこで、これまでの見学や講義で学んだ中で、木綿に関係すると推測される（民俗資料分類上では、「衣」の項目に属する）ものを、市民学芸員とともに搜索し、1か所に集めた。

集めた「衣」の項目に属する資料の中から、特に「河内木綿」

に関係する可能性のあるものを選出し、撮影に適した状態にするため、クリーニングを行うこととした。

10月9日は、京都造形芸術大学教授・伊達仁美氏の指導の下、資料クリーニングを実施した（写真4）。作業は、当施設内の歴史体験研究室で実施した。

資料に付着している埃をハケやブラシを使って払ったあと、それで落ちない土汚れなどについては水で濡らした綿棒などを使い、ふき取りを行った。このときの注意点としては、資料に墨書があった場合、水でふき取りをすると墨書が消えてしまう危険があるため、墨書がないか観察した上で、慎重に作業に取り組むよう呼びかけた。資料の構成部材に鉄の材質がある場合には、椿油を塗布した。

作業中に問題がいくつか発生したので、紹介したい。まず、これまでの座学の中で、木綿に関係する道具について学んできたが、それぞれの道具の細かい部品名などについては触れていなかったため、資料の状態を点検票に記入する際に部材名がわからない、ということで意見が上がった。また、今回は綿織り機、総車、座織り器といった複数の種類の道具を対象にしたため、よけいに混乱が起きた。こういった複雑な形状の資料を点検、クリーニングする際は、綿織り機に限定するなどして、情報を全員で共有できるように考慮すべきであるとわかった。

また、資料の本来の形を知らないため、資料の一部が欠損していた場合にも、何がどのように欠損しているのか推測できない、という意見もあった。

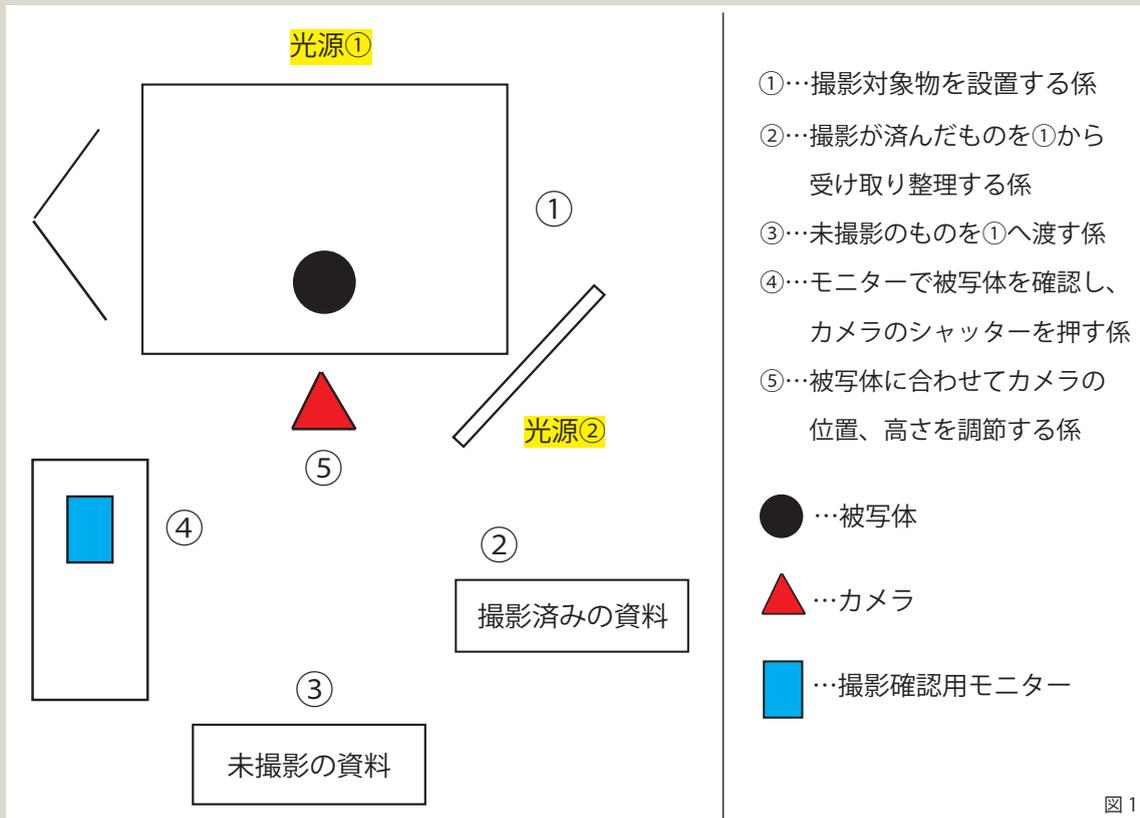


図1 撮影図

## 6. 市民学芸員との整理作業とアーカイブ化作業

2018年12月～2019年1月にかけて、デジタルアーカイブの構築に向けて、木綿関係資料の写真撮影を実施した。撮影作業は、昨年同様に堀内保彦氏（特定非営利活動法人フィールド）の指導の下、実施した。

### 6.1. 撮影方法

撮影に使用した機材やライティングについては、特定非営利活動法人フィールドの提案による方法で実施した。基本的には昨年と同様の形で撮影を進めていたが、今回は被写体の中に衣類が含まれていたため、衣桁掛けして撮影を行うこととした。

衣桁掛けした衣類の撮影は、撮影場所の天井高が低く「ライトバンク」の設置ができなかった。検討の結果、天井一面が白色塗料で塗装されていたので、「バウンスライティング」を用いることにした（写真6）。

「バウンスライティング」に際しては、バウンス面が無蛍光・無漂白の（スタジオ用）白色塗料の塗布が前提であるが、カメラの内蔵のセンサーで標準反射板（18%グレーカード）の簡易計測をした結果、[5000K（ケルビン）、ややマゼンタ側にシフト]という測定結果が得られた。テスト撮影画像を目視しても実際の被写体との差は認められなかったため、当館の使用目的には十分と判断し採用することにした。

本件の経験から、大型民俗資料の撮影セッティングが簡単・迅速にできたため、今後、積極的に採用できる撮影方

法に思われた。

### 6.2. 撮影手順

今回行った資料撮影の具体的な手順だが、大きく5つの役割を分担し、作業を行った。

図を用い説明するので、（図1）を参照されたい。①撮影対象物を設置する係、②撮影が済んだ資料を受け取り、未撮影のものと混ぜないように整理する係、③未撮影資料を準備し、①へ手渡す係、④パソコン上で、カメラのレンズで映している被写体を確認し、シャッターを押す係、⑤被写体に合わせてカメラの位置や高さの調整を行う係の5名に分かれた。

⑤の役については、カメラや三脚の扱いに長けていないと出来ないため、堀内氏にお願いした。その他の役については誰でも可能なため、市民学芸員が交代しつつ、一通り担当するようにした。撮影に要した作業時間は、撮影のセッティングを含むと述べ28時間ほどであるが、撮影のみの時間であれば約22時間で146点の資料を撮影することが出来た（写真7）。

市民学芸員との撮影作業は今回で2回目にあたるのだが、前年度のだんじりの彫り物や部材を対象に撮影時に比べ、資料の設置に時間がかかってしまった。

だんじりの彫り物は、基本的に大きさが均一である場合が多く、撮影前に大きさごとに仕分けておき、同じ大きさのものを順番に撮影するようしていれば、カメラの位置



写真 5. パウンスライティング /6. 撮影した資料

や高さの調整を資料ごとにする必要がなく、短時間で撮影を完了させることができた。

しかし、今回の資料群は、大きさも形も多種多様で、布関係の資料は衣桁が必要になったり、撮影する場合に資料をカメラに対してどのような向きで置くべきか迷うことが多々あった。どういった資料情報が欲しいかにより、資料の設置方法も左右されるため、学芸員が責任を持ち指示にあたる必要があった。

また、撮影対象資料の全体数を把握できていなかったため、作業途中に追加資料が発生したことから、当初見積もっていた撮影のスケジュールでは間に合わなかったことも反省点である。

1月22日には、撮影が完了した資料を収蔵庫に戻し、収蔵用の棚に配架した。今後、小学校の団体見学時や、一般来館者を対象にした収蔵庫のバックヤードツアーを予定しているため、ただ棚に配架するのではなく、資料が一望できるように収蔵展示を意識し、市民学芸員と意見を出し合いながら、資料を配架した(写真8)。

#### 7. 課題と今後の目標

今年度の活動では、市民学芸員とともに河内木綿を中心とした民俗資料のアーカイブ化を行った。木綿の道具や機織りの道具は、機織りなどの経験のない市民学芸員にとってはその用途について想像がつきにくいものも多く、資料理解に費やす時間が足りなかった。そのため、見学会や講

座といった資料理解のための時間をもっと多く設ける必要があったと反省した。撮影についても、前年度の反省を活かせず、計画よりも大きく遅れてしまった。

資料館の所蔵資料のアーカイブ化作業は今後も継続するため、市民学芸員と協力しつつ、今回の課題を解決するよう精進して取り組んでいきたい。また、アーカイブの活用についても、学芸員や研究者に限らず、市民学芸員自らが活用できるような環境を整えていきたい。

最後に、今年度の活動に関わった市民学芸員の感想や意見を紹介させていただく。

#### ■活動への参加2年目の市民学芸員

・昨年度は、他館の収蔵庫を見せて頂き、そこで「よかった」と思える収蔵方法を真似できれば・・・と思っていた。その中で、着物や布類をモスボックスに入れることが出来たのは、一歩前進なのかな、と思った。入口扉に虫除けのブラシが取り付けられたのは、収蔵庫らしくなったのかなあと思う。

・2度目の撮影をさせていただき、初めの作業を復習できた。棚に関しては、もう少し入用の物を購入可能だと無駄(?)な作業が減り、全体的に整っていくと思った。

・織物の道具の整理ということでしたがあまり、わからなかった。

・資料を保管する、という作業だけでも、それにまつわる諸々の事柄に、多くの気付いていなかった事を知った。



写真 9. 完成した収蔵庫

■今年度から参加した市民学芸員

・収蔵物の写真撮影について初めて現場を見て、体験できた。撮るにあたっての準備やその後の整理など連携をとりながらの共同作業は緊張を要したが、学ぶことも多かった。他館の見学は楽しみでもあった。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、堀内保彦氏（特定非営利活動法人フィールド）にご指導を賜りました。

参考文献

[1] 甲斐規予子：だんじりの彫り物の整理とアーカイブ化，文化庁平成29年度 地域の核となる美術館・博物館支援事業 進化系アーカイブと旅するミュージアム 平成29年度事業報告書,pp.12-22,(2018).

[2] 藤本悠・堀内保彦：市民も参加できる低コストで新しいデジタル・アーカイブの方法について，文化庁平成29年度 地域の核となる美術館・博物館支援事業 進化系アーカイブと旅するミュージアム 平成29年度事業報告書,pp.26-32,(2018).



## 第1部 第2章

### 「河内木綿」に関わる文献史料の整理とアーカイブ化

大畑 博嗣

大東市立歴史民俗資料館

#### 1. はじめに

本報告では、大東市立歴史民俗資料館（以下、当館と略す）が所蔵する古文書のうち、「河内木綿」・「木綿」に関する史料の整理・アーカイブ化について、当館の市民学芸員と共に行った作業について、報告を行う。

#### 2. 市民学芸員との翻刻作業

まずは、市民学芸員と行った古文書の整理・翻刻作業について触れる。

翻刻に入る前に、当館が所蔵する4つの古文書群（『河合家文書』・『平野屋会所文書』・『新田村庄屋家文書』・『東家文書』）から、河内木綿に関係する史料を抽出する作業から行った。当初、既刊の各文書群の目録を市民学芸員と共に調べて、史料を抽出する計画であったが、作業の進捗状況を鑑み、筆者が作業を行い、約6,000点ある古文書の中から「木綿」をキーワードに検索した結果、10点を抽出することができた。

その後、市民学芸員と共に各史料の調査カードの作成を行った。作業としては、昨年度のだんじり関連史料の調査と同様に、筆者が作成した史料調査の凡例に基づき、資料館で使用している調査カードに記入する形で作業を進めた。また、くずし字解読が得意な市民学芸員とそうでない方とのバランスを考え、解読が得意な方とそうでない方となるべく同じチームになるように、各史料に対して2～3人が担当する形でカードの作成を行った。カードに記載する

情報としては、「史料名称」・「外題・内題・上書き等」・「員数」・「形状」・「法量」・「差出人・作者・著者等」・「宛名」・「作・写・刊年代」・「備考」の9項目である。調査カードの作成は、2月14日現在10点すべて完了している。

調査終了後、翻刻作業に入った。

作業日を月2回定め、うち1日は昨年同様に市民学芸員からの要望があり、『くずし字解読辞典』と『くずし字用例辞典』の使用方法を学ぶため、吉川弘文館より出版されている『演習 古文書選』よりテキストを選定し、参加者と共に古文書解読の講座を行った。

そして、翻刻作業も昨年度と同様に、1点の史料に2～3人の市民学芸員が担当する形を取った。翻刻に際して、原稿用紙を利用して解読した文字を一字1マスに書き写す方法で進めて行った。また、翻刻作業中には筆者が作業場所に滞在し、市民学芸員が解読できにくくくずし字があれば、質問を受けて答えるというスタイルを取って作業を進めた。

だが、今年度は昨年度より継続して作業を行っている方以外に、今年度より参加する市民学芸員の方もおられたので、市民学芸員同士の交流を図ることと、作業の進め方や解読できにくくくずし字と一緒に調べ・考えてもらうために、継続の方と今年度からの方と同じチームになるように作業を進めた。このような取り組みをすることにより、継続して参加している市民学芸員の方に、新しく加入した市民学芸員に作業の進め方を説明することで、自分たちがこれまで行ってきた作業の再確認ができるのではないかと考えた。

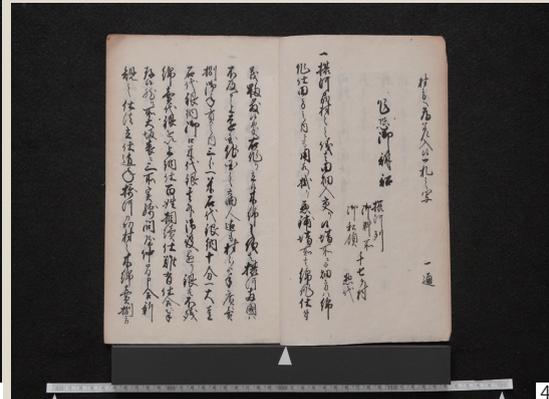


写真 1-2. 翻刻作業・古文書講座風景 /3-4. 今回撮影した史料

このような取り組みにより、2月14日現在10点中2点が翻刻を完了している。現在も作業が継続中であるので、来年度以降も作業を進める計画である。

## 2. 市民学芸員とのアーカイブ化作業

次に、市民学芸員と行った史料のアーカイブ化作業について触れる。

2018年11月に、調査カードを作成した10点の史料をアーカイブ制作に向けた写真撮影を市民学芸員と行った。なお、撮影は昨年度と同様に、全丁撮影ではなく、墨付きの箇所（文字が書かれている丁）のみ撮影を行った。

撮影には、特定非営利活動法人フィールド代表理事の堀内保彦氏にご協力を頂き、市民学芸員に撮影方法などを指導頂きながら撮影を進めた。今年度は、撮影スタジオの設営や、撮影用ライトの設定・調整、カメラの設定などの準備は堀内氏と共に行ったが、撮影作業については、昨年度2回に分けて撮影を行っているので、当日参加した市民学芸員が主体となり、撮影を進めていった。

市民学芸員が行った作業としては、撮影台への史料の設置、丁めくり、シャッターを切る、未撮影・撮影済み史料のチェックといった作業を分担して行った。今回も昨年度と同じように、カメラとテレビモニターをケーブルで接続し、カメラが捉えた画像をテレビモニターに映し出す方法で写真撮影を行ったため、撮影者だけでなく複数人の目で被写体になる史料の位置調整や、未撮影・撮影済み史料の

チェックが出来、従来行う撮影作業よりも撮影ミスなどを減らすことができると考えられる。

上記の作業を進めるなかで、昨年度は74点と点数が多い上、不慣れな作業であったため、戸惑う市民学芸員もいた。しかし、今年度は昨年度の経験があるため、積極的に作業に参加する方が多かった。

## 3. おわりに

昨年度と今年度の2ヶ年に渡り、市民学芸員と共に古文書の調査・翻刻作業と、史料の撮影作業を行ってきた。

他所において、古文書の翻刻作業は、史料の劣化や損傷する事を鑑み、あらかじめ撮影して紙焼きの状態になった物を使用して作業を行う事が多いが、当館では原史料を使用し作業を行ってきた。そういったなかで、市民学芸員のほとんどの方は史料を丁寧に扱う方が多いが、一部の人は煩雑に扱うところを目にすることがあった。

今後は、市民学芸員に史料の大切さを伝え、扱い方のレクチャーを行い、今回得たノウハウを活用しながら、協力して調査・展示を行っていただければと考えている。

## 参考文献

拙著「だんじりの文献史料の整理とアーカイブ化」(『進形アーカイブと旅するミュージアム 平成29年度事業報告書』)

## 第1部 第3章

### 文化財撮影における近赤外線カメラの可能性

藤本 悠

奈良大学文学部地理学科

#### 1. はじめに

近赤外線カメラを文化財に用いることは従来から行われてきた。絵画作品に近赤外線カメラを用いることで、木炭で描かれた下描きや墨の描線が明らかになることも少なくない。国内においても木片に書かれた墨書文字を読み取るために用いられることがあり、その有効性は広く認識されている。

しかしながら、文化財の撮影における近赤外線カメラの利用は極めて限られているのが現状である。最も大きな理由としては文化財用の近赤外線カメラの価格がある。プロフェッショナル機材としての近赤外線カメラは高価であり、予算が限られている中小の博物館や地方の自治体にとっては気軽に利用できる機材ではない。また、すでに導入されている機関であっても、機材の扱いに慣れている技術者が限られ、気軽に利用できない状況にあることも少なくない。

赤外線を用いた調査が限られている理由には、価格の問題に加えて、近赤外線カメラの仕組みそのものに関する理解不足の問題もある。近赤外線カメラの仕組みを理解することで様々な応用的な利用方法が考えられるが、一般的に効果が認められた用途で限定的に利用されているだけで、応用的な使い方や実験的な試みは十分に行われていない。そのため、多くの研究者や学芸員、調査員にとって、近赤外線カメラは「用途が限られた特殊な機材」として認識され、その利用範囲を拡大させるという動きに繋がらなかったと考えられる。

そこで、本報告では近赤外線カメラを様々な資料に使った結果を示すとともに、近赤外線カメラの仕組みを整理し、自分で改造して近赤外線カメラを作成する方法を紹介する。

#### 2. 近赤外線カメラの利用実験

本研究では自分で改造した近赤外線カメラを使用した。そのため、最初に文字が書かれた半紙に柿渋液を塗布して汚損させたもので実験を行った。この資料の表面はひどく汚損されていて、書かれている文字を読み取ることはできないが、改造近赤外線カメラを使って撮影すると、期待通りに「織姫まつる織物神社」という文字を読み取ることができた。この実験結果から、自作の近赤外線カメラが十分に機能していることが確認できた。

次に実験を行った資料は明治期の糸車の部材に押印された文字と江戸時代に書かれた古文書の断簡である。まず、糸車に押印された文字に関しては、肉眼の状態でも文字を読み取ることができたが、自作の近赤外線カメラを用いることで、より鮮明に文字を読み取ることができた。一方、江戸時代の古文書に関しては、糸車に書かれた文字と同様に、書かれた文字が鮮明化されたことに加えて、肉眼では確認できなかった文字を発見することができた。これらの実験内容から、従来から指摘されていたように、近赤外線カメラを使用することで墨書文字は鮮明化され、肉眼では確認できなかった文字を読み取ることができることが確認できた。

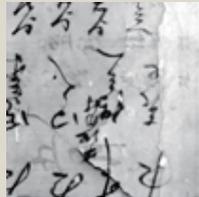
しかしながら、これらの実験は近赤外線カメラの主たる用



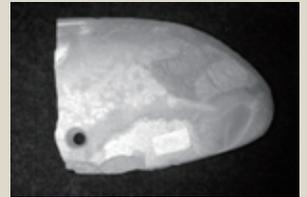
半紙に柿渋液を塗布した資料



糸車の部材に押印された文字



楮紙の古文書断簡の文字



緑泥片岩製の石包丁



サヌカイト製の磨製石剣の破片



弥生時代の土師器



古墳時代後期の須恵器



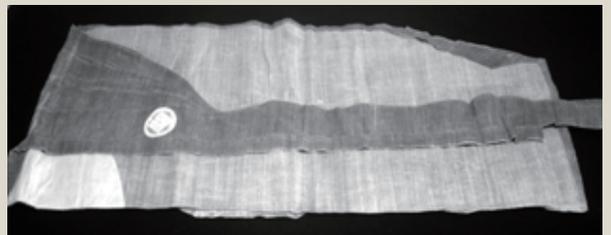
19世紀の磁器（銅板転写）



18世紀後半～末の蕎麦猪口（染付）



時期不明の木綿の仏餉袋



江戸時代の麻製の袴

図1 実験で撮影した様々な資料

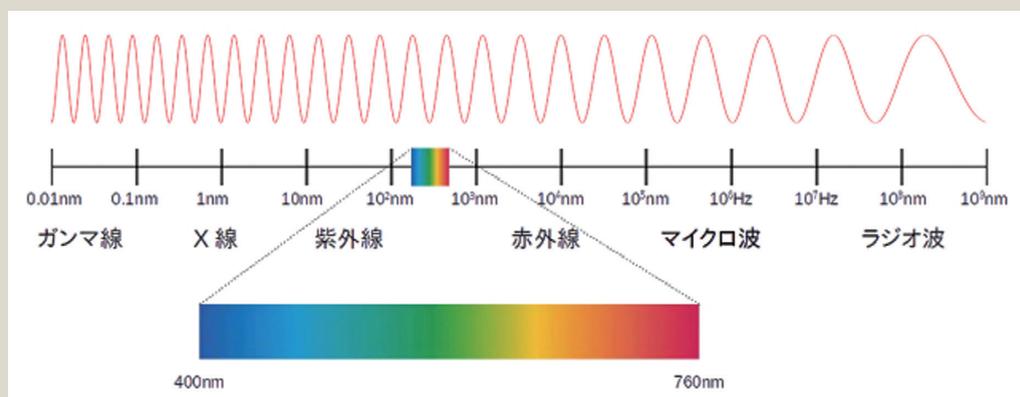


図2 電磁波の波長と種類

途として広く知られたものであり、一般的には使わない用途で近赤外線カメラを使用した場合にはどのような結果が得られるかについては十分に検討されていない。そこで、本研究では、石器や土器、陶器、織物についても実験を行った(図1)。

石器に関しては弥生時代の緑泥片岩製の石包丁とサヌカイト製の磨製石剣の柄の部分とされる資料を用いた。その結果、石包丁の場合には、緑泥片岩の組成の違いと思われる部分が観察しやすくなり、サヌカイト製の磨製石剣に調整痕が見やすくなった。観察目的によっては近赤外線カメラを使用することには一定の効果があると考えられる。

土器に関しては、弥生時代の土師器、古墳時代の須恵器、近代の磁器をそれぞれについて近赤外カメラによる撮影を行った。まず、土師器の場合には表面の汚れや変色したと考えられる部分が透過したことによって、得られた画像から調整痕を識別することが容易になった。また、焼成時に付着した煤の部分がはっきりと観察できるため、土器制作に関わる情報を推測上でも何らかの効果があると考えられる。一方、須恵器の場合には、土師器ほどの視覚的な効果を十分に得られることはできなかったが、石器と同様に調整痕の観察がしやすくなったような印象はあった。

想定外の結果が得られたのは近現代の磁器であった。19世紀の銅板転写による大量生産品の場合、近赤外線カメラで撮影すると模様の部分が透過して表面が白く写るのに対して、18世紀後半から末にかけての染め付けの場合には、

模様の部分が透過しにくく、表面が全体的に暗く写った。また、染付の場合には焼成時にできる微細な表面のひびが明瞭に写るため、画像からも大量生産品と染め付けとの区別ができる。

最後に実験したのが織物である。ほとんどの場合、染料によって染め付けられた生地は透過するため、絵柄を観察するには不向きであるが、色が透過するために画像から織り方を観察するには適している可能性はある。また、染める際に用いた色素の種類(あるいは混合の程度)によっては、完全に透過しないこともあり、材質を推定するための手がかりとして利用できる可能性はある。

### 3. 電磁波の特性

文化財に関わる分野では近赤外線カメラの能力について、赤外線の性質と炭化物との関係から説明するものが多い。したがって、石器や陶磁器などに対して近赤外線カメラを使うことに対しては疑問に思う人もいるかもしれない。しかしながら、近赤外線カメラを様々な資料に対して利用することは奇抜なアイデアではなく、原理的な点から考えてみると、むしろ、積極的に実験するべきである。

文化財資料を観察する上で見た目の「色」は最も重要な情報の一つであるが、「色」は「電磁波」と呼ばれる存在の作用によって得られる現象である。特に、「色」に関わる電磁波は「可視光」とよばれ、読んで字のごとく、人の目で見ることができる「電磁波」のことである。可視光に含ま

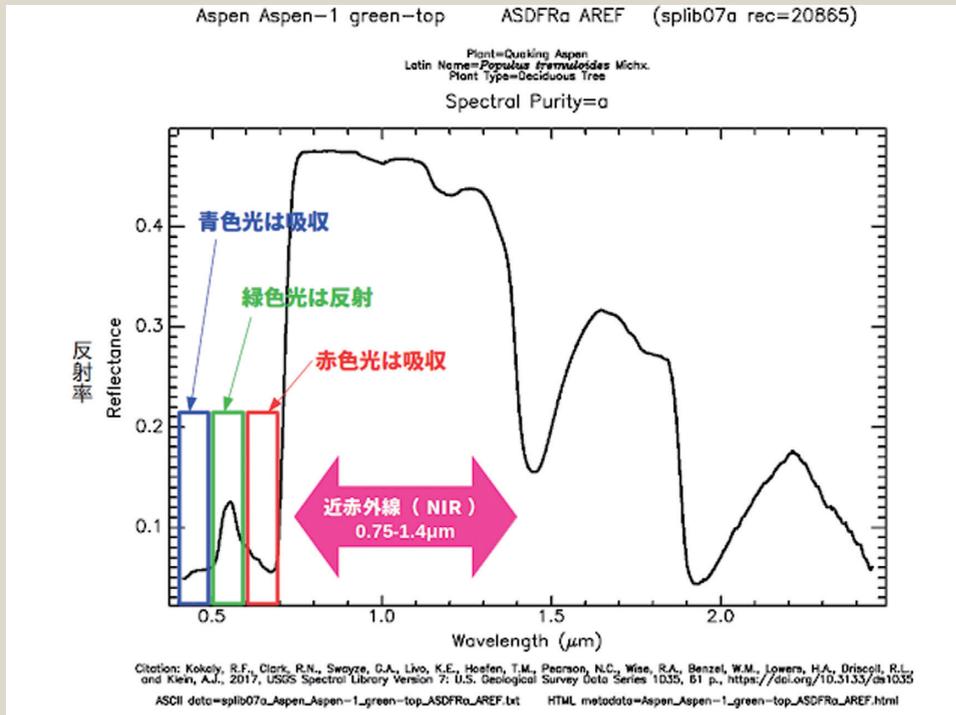


図3 植物の葉の場合の電磁波の反射特性

れる波長のなかでも、特に、赤色、緑色、青色の3つの色の成分を「光の三原色」とよび、この3つの光の成分を組み合わせることであらゆる色が表現できるとされている。一般的な説明では、「光の三原色」は「色の三原色」と異なり、全ての光の色の成分を合わせると「白色」に近づき、逆に全ての光の色の成分を取り除くと「黒色（光が無い状態）」に近づくとされている。

可視光に限らず、電磁波が物質に当たったときの関係は、透過、吸収、反射の三種であり、物質の構成要素と電磁波のエネルギー、電磁波の波長が大きく影響する。太陽光のように異なる波長の電磁波が合成された光を特定の物質に照射すると、その波長域によって、透過する電磁波、吸収される電磁波、反射される電磁波に分解される。この三つの特性のうち、人の目に「色」として認識されるのは「反射」された電磁波である。例えば、植物の葉はクロロフィルが青色光と赤色光を多く吸収し、緑色の光を反射するため、結果的に反射した緑色の光を人の目で感受し、植物の葉を「緑色」として認識する。可視光に限れば、人の目に届いた物質の色はその物質の反射特性によって得られるので、黒色に見える物質の場合には可視光の大部分が物質の表面で吸収され、ほとんどの光が反射されないことを意味し、白色に見える物質の場合には可視光の大部分が吸収されずに反射されていることを意味する。

電磁波の透過、吸収、反射は電磁波の「波長」とよばれる性質と、物質の分子構造が大きく影響している。例えば、

太陽を光源として考えた場合、可視光域を超えて、非常に幅広い領域の電磁波が地球に降り注いでいる。この「電磁波」にはガンマ線やX線などの波長の短いものや、ラジオなどに用いられる波長の長い電波なども含まれる（図2）。電磁波は波長域によって特性が異なり、短い波長の光はエネルギーは強いが、空気中の微粒子に衝突して発散するために直進性が低く、逆に、長い波長の光はエネルギーは弱い、空気中の微粒子などの影響を受けにくいために直進性は高い。例えば、明け方と夕方に空が赤く見えるのは、直進性が低い青色の光が空気中の微粒子によって拡散されるのに対して、直進性が高い赤色の光は空気中の微粒子の影響を受けずに大気層を通過することができるためである。

図3に示した植物の葉の電磁波の反射特性をみると、可視光域よりも長い波長域に三つのピークがあり、最初のピークが750～1,400nmの波長域にあることが解る。この波長域は近赤外域に含まれ、人の目には見えない電磁波の波長である。この波長域は植物にとって有害となる波長域であるため、クロロフィルが活性状態にあると反射強度が高まるとされている。この性質を利用すると、人の目には緑色に見える葉であっても、健康的な葉は赤色の光を多く吸収し、近赤外の光をより多く反射する。その逆に、不健康な葉は赤色の光の吸収量が低下し、同様に近赤外の光の反射量も低減することになる。

あくまで、人の目が感知できる電磁波の範囲の反射光が「色」として認識されているのであって、紫外線などの可視



図4 実際に自作した近赤外線カメラ

光域よりも短い波長の電磁波と赤外線などの可視光域よりも長い波長の電磁波（赤外光）についても吸収されたり、反射される。物質による電磁波の吸収と反射は可視光域には限らない。すなわち、人によって認識される「色」は物質によって反射された可視光域が合成されただけであり、不可視な波長を含めると、人の目では判断できない物質の状態を知ることができる可能性がある。したがって、可視光域以外の電磁波の反射を感受できるセンサがあれば、人の目に見えない状態を観察することができるようになる。

例えば、リモートセンシングとよばれる分野では、人工衛星に搭載された複数のセンサによって得られた画像を使用するが、この時に生成される画像は可視光域だけではなく、紫外域や赤外域のデータを利用している。

リモートセンシングの分野では人工衛星に搭載されたセンサを使用するが、同様のセンサを地球上で使用することは可能であり、そうしたセンサを用いることで、人の目では見えない物質の特性を知ることができる。そうした機器の一つが近赤外線カメラである。電磁波の透過、吸収、反射のそれぞれの特性は物質によって異なるが、近赤外線カメラによって絵画を撮影した際に絵の具の下に木炭によって描かれた下絵が見える理由は、赤外線が表面の絵の具の層を透過し、木炭で描かれた部分で吸収されるからである。同様に、木簡の文字がはっきりと見える理由も表面の汚れや含浸させた樹脂の層を透過し、その下の墨の部分が近赤外光を吸収するためである。また、「可視光」は物質には吸

収されにくく、反射されやすいという特性があるため、表面を水で濡らしたり、むしろ、透明の樹脂等でコーティングすると近赤外線のみが対象物で反射あるいは吸収するため、より鮮明な像を得ることができる可能性が高い。

今回の実験では、石器や土器、陶器、織物などについても近赤外線カメラで撮影を行い、若干ではあるが、石器や土器に関しては調整痕などが観察しやすくなった。これは表面上の微細な汚れや塗膜などによって、可視光では反射していた部分が近赤外線では透過したことが原因であると考えられる。そうした特性を考慮すると、磁器や陶器の釉薬などの表面に光沢のあるものに関しては、近赤外線カメラで観察することによって、可視光（見た目の色）だけでは観察できなかった情報を得ることができる可能性がある。

#### 4. DIY 近赤外線カメラ

近赤外線カメラを利用すると、物質ごとの赤外線の吸収特性によって肉眼では観察しにくい事象や、全く確認できない事象の発見できる可能性がある。しかしながら、ここで問題となるのが近赤外線カメラの価格の問題である。市販されている近赤外線カメラは数十万円～百万円を超える商品が中心であり、予算に限りがある中小の博物館や地方の自治体が気軽に購入できる機材ではない。そこで、本稿ではDIY (Do It Yourself) の近赤外線カメラについて検討してみる。

近赤外線カメラを完全に自作するには電子工作に関する

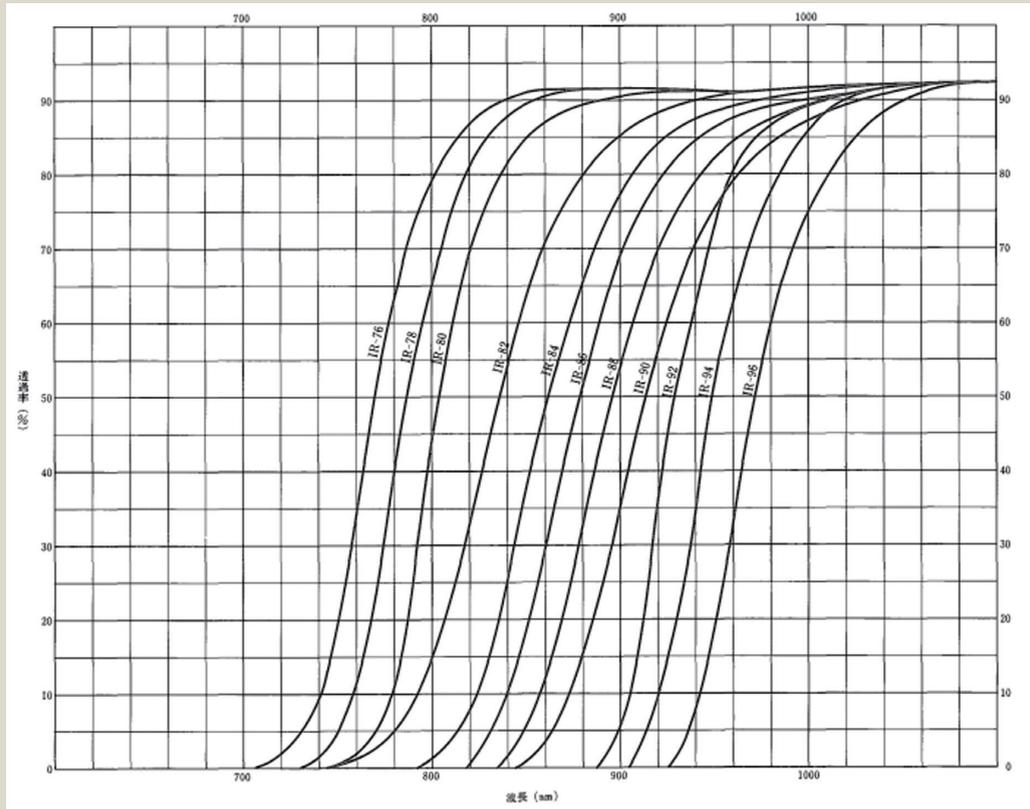


図5 FUJI FILMのトリアセテート製シャープカットフィルターの仕様  
 (『Fuji Film フィルムハンドブック 富士フィルム光学フィルター』より引用)

知識のみならず、部品の入手も含め、難易度は非常に高い。一方、市販されているデジタルカメラを近赤外線カメラに「改造」する方法は比較的簡単であり、プラモデルを説明書通りに作ることができれば、難易度も高くはない。また、国内には近赤外カメラへの改造を受託している業者もあり、手先が不器用な人は業者に委託することで、数万円程度で改造してもらえる。

なお、今回の実験で使用したのは Panasonic Lumix DMC-G1 である。このカメラは 2008 年に Panasonic から発売された総画素数は 1,306 万画素の ミラーレス一眼カメラであり、マイクロフォーサーズシステムを最初に採用したカメラである。今回の実験では、このカメラを分解し、ローパスフィルタを取り除き、代わりに専用のガラス製 IR フィルタを取り付けた (図 4)。さらに、近赤外の光源を確保するために、10,000 円程度で販売されている Polaroid 製の赤外線ライト (LED36 球) を三灯購入した。DMC-G1 はすでに生産が終了したカメラで、中古市場では 10,000 円程度で流通している。したがって、カメラ本体も含めて材料費は 50,000 ~ 60,000 円程度で作ることができる。決して安くはないが、プロフェッショナルの近赤外カメラの 1/10 ~ 1/30 程度であると考えれば、十分に許容できる価格である。

一般的に市販されているデジタルカメラでの画像は可視光域の光によって得られるが、センサの性能によって可視光域に限定されているわけではない。現在のデジタルカメ

ラに搭載されているイメージセンサは可視光域よりも少し広い範囲を感受することができるが、赤外域以上の波長をカットするためのガラス板 (ホットミラーあるいは近赤外線反射ガラス) をイメージセンサの前に設置することで、可視光域のみがセンサに当たるようになっている。したがって、カメラによって多少の違いはあるものの、基本的にはデジタルカメラを分解してこのガラス板を取り外し、代わりに近赤外域以上の電磁波を通すフィルタ (ローパスフィルタあるいはシャープカットフィルタ) を設置することで近赤外線カメラを自作することができる。

市販のデジタルカメラを近赤外線カメラに改造する方法は一部の写真愛好家や天体写真を撮影するアマチュア間では以前から知られていて、具体的な方法についてはインターネットで検索すると関連する情報は簡単に収集できる。また、文化財資料の撮影に改造した近赤外カメラを利用した例もある (野村 2016)。そのため、近赤外線カメラを DIY で作る方法は難しくはない。ただし、改造をしやすいカメラと改造をしにくいカメラは存在し、インターネットでデジタルカメラの分解方法を検索して、説明を見ながら分解と組み立てができそうなモデルを選ぶのが無難である。なお、最新モデルの場合には分解と改造に関する情報が少なかったり、保証対象外となるため、注意が必要である。

IR フィルタはある特定の波長域よりも短い波長をカットするためのフィルタであり、FUJI FILM のトリアセテート製 IR フィルタは 20nm 刻みで、概ね 700 ~ 920nm 以下の波

長をカットするフィルタがある（図5）。例えば、IR-76の場合は760nmの波長域で電磁波を30%程度透過する。最も高い波長域に対応しているIR-96の場合は960nmの波長を30%程度透過する。一般的に近赤外領域は750nm～1,400nmとされているため、IR-76のフィルタを使った場合には赤色光の一部（700～750nm）の光が若干であるが含まれることになる。近赤外線の吸収特性と反射特性は対象物によって異なるが、主として墨書資料での利用を前提とするのであれば、IR-86程度が目安となる（野村2016）。

#### 5. おわりに

本研究の結果から、近赤外線カメラを用いることで、肉眼では観察できなかった部分が明らかになることに加えて、表面の汚れや変色の影響を低減させ、表面を観察しやすくなることが明らかとなった。こうした効果は木管や古文書をはじめとする墨書文字の判別のみならず、土器や石器の調整痕や文様など、立体的な特徴を判別する上でも有益な情報を得る手段となり得ることが解った。また、磁器の例にみられるように、材質の違いを判別する手段としても利用できる可能性が明らかとなった。

ただし、同じ種類の資料であっても、近赤外線カメラを使うことによって得られる効果の差が大きく、近赤外線カメラの有用性を資料の種類によって決めることは難しい。また、表面をあえて水で湿らせたり、樹脂等でコーティングすることで画像を鮮明化できる可能性もある。したがっ

て、木管や墨書文字以外の資料に対する近赤外線カメラの有用性を明らかにするためには、あらゆる資料に対して近赤外線カメラによる撮影を行い、基礎データを蓄積していくことが望まれる。

また、対象となる物質の特性を正確に把握するためには分光光度計と呼ばれる特殊な機材が必要であり、その特性に合わせた波長域で撮影を行うべきである。そうした科学的に何らかの実証が求められる場合には、この近赤外線カメラの使用は適さない。しかしながら、肉眼では解らない状態を観察するための簡易の手段としてDIYの改造近赤外線カメラを使用することにはある程度の意味があると考えられる。

#### 参考文献

- 富士フィルム (N.D.). 「シャープカットフィルター」, 『Fuji Film Photo Handbook 光学フィルター』, pp. 5-11.  
野村正弘 (2016). 改造したコンシューマ向けデジタルカメラを用いた墨書の赤外線撮影, 「メディアと情報資源: 駿河台大学メディア情報学部紀要」, 23-1, pp.9-21, 駿河台大学メディア情報学部.



## 第1部 第4章

### 市民学芸員と学ぶ「モノづくりの歴史」と収納棚づくり

森田 拓馬

大東市立歴史民俗資料館

#### 1. はじめに

「進化系アーカイブー市民学芸員と作る収蔵庫ー」事業の一環として、本年度から実施した市民学芸員活動「つくり隊」の活動について報告する。

#### 2. 事業目的と内容

本事業は市民学芸員が資料の「素材」「構造」「道具」などを切り口にして、『ものづくり』の歴史や、民具、道具などの資料形状をより深く理解することを目的としている。

また、実際のものづくり体験を通じて培った技術や能力を活かして、任意の寸法と構造で大東市立歴史民俗資料館（以下、資料館）が所蔵する民具資料の保管棚を作ることを今年度の最終目標とした。そのため事業内容は座学と実技、ものづくりを学べる博物館見学で構成されている。

#### 3. 活動報告

##### 3.1. 座学と実技

つくり隊に登録した市民学芸員は14名だが、登録していない市民学芸員でも参加が可能な活動にしていたため、各講座ごとに参加人数は毎回変動している。主に毎月1回、第3金曜日を活動日に設定した。活動日と内容は以下に記載する。

#### 2018年

4月20日（金） 自己紹介、座学「人間と道具」  
5月18日（金） 鋸を使って「清少納言の知恵の板」作り  
6月22日（金） 曲げわっぱ作り（前編）  
7月20日（金） 曲げわっぱ作り（後編）  
8月24日（金） 座学「木材」  
9月21日（金） 竹中大工道具館見学会 勉強会  
10月19日（金） 竹中大工道具館見学  
11月16日（金） 木箱を作ろう（前編）  
12月21日（金） 木箱を作ろう（後編）

#### 2019年

1月18日（金） 収蔵庫の民具棚を作る（前編）  
2月15日（金） 収蔵庫の民具棚を作る（後編）  
3月15日（金） 一年の振り返り

本年度は日本では昔から身近な素材として使用されてきた「木材」を重点的に取り扱った。大東市には北新町遺跡の五世紀中ごろの地層から出土した「戸口装置」がある。

また、中世以降、市内地域では「踏車」の生産拠点ともなっており、大東市と木材のかかわりは深い。また、資料館で収蔵されている民具も木製が多く、木工技術を知ることは資料の理解に大いに役立つと考えた。

座学では木材の特徴や木材加工工具の使い方・発達史以外に、「二次的道具（メタ・ツール）」と呼ばれる「道具を作



写真 1-2.「曲げ物」作り風景 /3. 座学 /4. 竹中大工道具館見学

るための道具」「道具を使うための道具」を使うという人類の特徴にも触れた。

実技では江戸時代に庶民の間で人気を博した「清少納言の知恵の板」を作ってみることや、木材の水分と熱を利用する加工方法の「曲げ物」作りを通して、木材や加工道具の扱い方や特徴を学んだ。主に前半の実技では手動道具を使って機能に慣れ、後半では同じ機能を持つ電動工具を使用した。

### 3.2 博物館見学

10月19日には、竹中大工道具館（兵庫県神戸市中央区）の見学に行った。竹中大工道具館は株式会社竹中工務店が設立した大工道具を専門に扱う博物館である。大工道具だけでなく、それらの道具を使って加工した木材や、木組や継手などの技法も紹介されていた。道具の発達と、それに伴って加工できる材料が変化したこと、材料を有効利用するために編み出された技術とその変化などを、実物資料を見ながら学ぶ貴重な機会となった。当日は現地集合し、2グループに分かれて見学を行なった。グループに解説ボランティアが入って下さり、それぞれ約90分の解説を受けた。

### 3.3 収蔵庫の棚製作

座学及び実技経験を踏まえ、今年度の最後に収蔵民具を整理する棚を製作した。歴史民俗資料館が所蔵している民

具は多種に渡り、寸法や重量もそれぞれ異なる。現在は既製品のスチール製棚を使用して資料を整理しているが、中には既製の棚には収まらない大きさの資料もあり、収蔵庫空間を有効に利用しているとは言い難い。

今年度は現状で2台の木製台に並べて収蔵しているだんじり関連の資料を、縦方向に積み上げて整理できるような棚を作り、限られた収蔵スペースの有効利用を考えた。だんじり資料は「大屋根」と呼ばれる部材で長さが2メートル以上あり、スチール棚には置けず、平面的に置いてあった。ホームセンターで販売されているツーバイフォー材を柱として使用し、棚板はラワン合板を使用した。これらは資料収蔵庫での使用を考慮し、購入してから施設内に保管し、一定期間で変質や虫害が無いことを確認してから使用している。

### 4. おわりに

ものづくりを通じて、より深く文化財資料の見方を習得して頂く試みは、一定の成果を上げたと感じている。もちろん一朝一夕に得られる技術はなく、継続して活動を行うことが肝要だろう。しかし、「どうやって作ったのだろう」「材料は何だろう」という視点を持つところから、「自分だったらこうやって作る」という視点を獲得する市民学芸員が、今後も増えていくよう取り組みたい。

なお、収蔵棚の制作については大東市立歴史民俗資料館の事業としてこれを実施した。



## 第2部 旅するミュージアム

アーカイブ化された資料を活用し、地域の企業や団体とともにモバイルミュージアムを作成する。他分野と連携することで、来館困難者に対しても「博物館体験」の提供を可能なものとする。



第1章では、市民学芸員とつくってきた「河内木綿」をテーマとした新しい「旅」について紹介する。木綿を栽培するとともに、近隣の博物館等で行われている和綿に関する活動を見学し、私たちにできること、したいことを探求していった。

第2章では、アウトリーチに関する研修について報告する。単に手法だけでなく、そのままでは行き届かないところへ手を伸ばすというアウトリーチ本来の目的を市民学芸員や学芸員、さまざまな立場の人と考えるために実施した。

また、本研修にあたって実施したアウトリーチの視察や実践についてその内容を紹介する。

## 第2部 第1章

### 市民学芸員と作る「河内木綿」の旅

森井 綾乃

大東市立歴史民俗資料館

#### 1. はじめに

「河内木綿」について広く伝えるアウトリーチの準備として、大東市立歴史民俗資料館（以下、れきみんと略す）の市民学芸員とともに5月から木綿の栽培を行うこととなった。活動の参考として、6月に木綿栽培実績のある他館の見学を行い、木綿作りや河内木綿の歴史について学んだ。8月と10月には、収穫した木綿を活用するため、木綿を織る活動実績のある他館の見学を行った後、12月から1月にかけて糸を紡ぐ練習を行った。

筆者はさらに、他地域の「丹波木綿」、「丹波布」、「松阪木綿」、「伊勢木綿」、「赤穂緞通」といった伝統的な木綿織物の活用事例を参考とするため、11月と12月に外部有識者と共に視察調査を行った。

本報告では、今年度の旅するミュージアム事業（以下、本事業）として取り組んだこれらの活動内容について報告する。

#### 2. 河内木綿をつくる

河内木綿について学ぶために、木綿の栽培と栽培の活動実績がある八尾市立歴史民俗資料館の見学を実施した。

本報告の活動に取り組んだのは、筆者が担当した平成30年度学芸員提案事業「河内木綿知り隊・作り隊」（以下、木綿隊と略す）の登録者および登録外の希望する市民学芸員である。木綿隊は河内木綿について知ることと作ることを目的として発足し、1年間にわたって活動を行った。

#### 2.1. 木綿を育てる

実施日：4月19日、27日、30日、5月4日、6日、9日、14日、16日、17日、6月25日（日々の水やりや雑草取り、木綿の収穫、綿干しについては除く。）

参加延べ人数：46名

河内木綿が作られた工程について理解するために木綿栽培に取り組んだ。栽培場所は、当館の位置する大東市立歴史とスポーツふれあいセンター（以下、ふれあいセンターと略す）の空きスペースを活用した。

ふれあいセンターは、元小学校の校舎や体育館、グラウンドを活用した複合施設である。貸館を行っているグラウンド横や体育館横のスペース、植え込みの一角等といった使用可能なスペースを探し、合計85m（一か所に2列の畝を作っている場所もあるため、畝合計は100.9m）の場所を使って木綿の栽培を実施した（写真1～4）。土作りから播種、支柱を立てるに至るまでは不定期に作業日を設けたため、参加者の入れ替わりが多かった。そこで、作業内容を次の作業員へ共有するために作業日誌（写真5）を用意した。

支柱立てが終わり、日々の水やりや雑草引き、収穫といった作業に移ってからは、れきみんスタッフが主に作業を行った。れきみんでは勤務がシフト制となっており情報共有が難しいため、水やりチェック表（写真6）を用意して、引継ぎ事項も書き込むようにした。



### 木綿隊 わた作業記録

1. 敷地内に今回の作業場所に印をつけてください。

2. 作業内容・使用道具

重たい 軽いの使用方が違う。

3. 作業内容メモ (あとに作業する人へ伝えたいことなども記入してください)

水筒・帽子 必要

心配事  
大雨の時の土崩れ

H20  
日付 4.27 記録者

7月 わた水やりチェック

※水やりは、3F廊下の裏で、  
くぼみに(浅い)は水やりは注意

日	1	2	3	4	5	6	7
		×	休館	×	×	×	×
8	木(取) ×	水 ○	10 木 ○	11 木 ○	12 木 ○	13 木 ○	14 木 ○
15	木 ○	16 木 ○	17 木 ○	18 木 ○	19 木 ○	20 木 ○	21 木 ○
22	木 ○	23 木 ○	24 木 ○	25 木 ○	26 木 ○	27 木 ○	28 木 ○
29	木 ○	30 木 ○	31 木 ○				

写真 1. 木綿栽培前 (施設入口付近)/2. 木綿栽培後 (施設入口付近)  
3. 木綿栽培前 (北側フェンスとグラウンドの間)/4. 木綿栽培後 (北側フェンスとグラウンドの間)  
5. 作業日誌 /6. 水やりチェック表



写真 7. 播種前日、泥水(左)と水(右)にそれぞれ浸けた種  
8. ポットで発芽させた畝(左)と地植えの畝(右)

『綿圃要務』坤之巻(大蔵永常著。天保4年(1833))を参考にして、播種は5月9日に行った。栽培にあたって、今年八尾市立歴史民俗資料館より1,680個の木綿の種の提供を受けた。1つの穴に対して3個ずつ種を蒔いて芽が出た後、6月9日に間引いたものと、芽が出なかったものを差し引いて、成長したのは合計で522本になった。木綿の栽培に関しては、肥料や水やりの必要性について情報が錯綜したため、様々な条件下で育てて様子を観察することにした。



まず、播種の前の一晩種を水に浸ける作業については、1,680個の綿の種を半分ずつに分け、泥水に浸けたものと水に浸けたものを用意した(写真7)。水浸けと泥水浸けの種は畝を半分ずつに分けてそれぞれ配置し、観察した。また、畝に直播するものとポットに蒔いて発芽後畝へ移植するものを分けて観察した。ポットに入れる土に関しては、鶏糞

と石灰をグラウンドの土に混ぜ込んで使用した。畝の土に関しては、当施設のグラウンドの土と、畝を作る場所の土とを混ぜて使用したが、グラウンド以外の土は粘土質だった。場所によっては石灰を混ぜた土と石灰を混ぜていない土を用意して、観察を行った。

結果的にこれら条件の違いによる傾向であると断言出来る結果を得ることは出来なかった。それは、育てていくにしたがって畝ごとの日光の当たり具合や、木綿栽培が行われる以前の利用において雑草対策のために塩を撒いていた場所や、以前にカボチャを育てていた場所、敷いていた芝生をはがして畝を作った場所といった条件の違いが影響しているように思われたからである。同じスペースに、直播とポット撒とをそれぞれ別の畝にして収穫した実綿については、顕著に直播の成長が悪く、収穫量も少なかった(写真7)。しかし、直播の成長具合の要因としては播種の際に一切鶏糞を使用していないことや、発芽や成長にひどい粘土質が影響し根を伸ばすことを阻害されたのではないかと、または畝の横にある小屋や畝の傾斜具合による日当たりと水はけ具合の違いといった様々な可能性が考えられ、同じエリアではあるが原因を絞り切れなかった。

以上のような点から、今回条件を分けたことによる成果が得られなかったのは、場所ごとの条件の違いを想定しきれていなかったことが原因であるので、次年度以降の木綿作りではそういったことを考慮し、育て方について検討したいと考えている。



写真 9. 木綿畑見学 (八尾市立歴史民俗資料館) / 10. 綿繰り機体験 (八尾市立歴史民俗資料館)

## 2.2. 八尾市立歴史民俗資料館の見学

実施日：6月21日

参加人数：20名

八尾市立歴史民俗資料館(以下、資料館と略す)は、30年にわたって木綿を栽培する取り組みを続けている。木綿の成長具合や畑の様子を参考とするために、資料館の見学を実施した。なお、今回の見学会は木綿関係の資料整理に取り組む「収蔵庫整理し隊」と合同で行った。収蔵庫整理し隊の活動については、第1部第1章を参照されたい。

八尾市では、「河内木綿まつり」というイベントが毎年行われるなど、河内木綿の保存・伝承活動が盛んだ。この「河内木綿まつり」を主催しているのが、資料館である。

資料館の常設展示では、大東市とも繋がりのある大和川の川違えや、川底が木綿畑として利用されるに至ること、さらに河内木綿の流通等について知ることが出来る。資料館学芸員の李熙連伊氏による案内のもと見学し、河内木綿の歴史や歴史の伝え方について学ぶことが出来た。また、八尾市内で収集された下機の復元機が展示されており、それまで実際に下機を見たことがなかった市民学芸員にとって、初見の下機となった。

次に、資料館の木綿畑を見学した(写真9)。木綿は他品種と交配しやすいため、資料館では気を配りながら種の保存に努めているそうである。畑の様子や木綿の成長具合を比較することが出来て大変参考になった。

さらに、綿繰り機の使用方法のレクチャーを受けた後、綿繰り体験(写真10)をさせていただいた。また、綿打ちと糸紡ぎの実演もあり、自分たちが育てている木綿を収穫した後の作業について具体的に知ることが出来た。

## 3. 収穫した木綿の活用に向けて

育てた木綿を収穫後活用することの参考とするため、他館の活動を市民学芸員と共に見学した。見学は、織ることについて活動実績がある交野市歴史民俗資料展示室の機織り教室と、相楽木綿伝承館の相楽木綿織物教室において実施した。

また、見学で得た知識を活かし12月より収穫した木綿を用いて糸を作る練習を開始した。

### 3.1. 織る活動の見学

#### (1) 交野市歴史民俗資料展示室 機織り教室

実施日：8月29日

参加人数：15名

機織り教室の活動は、交野市歴史民俗資料展示室の2階で行われている。活動は17年目で、現在9名が教室生として所属している。交野市歴史民俗資料展示室には交野市で発見された下機をもとに復元された下機が8台あり、機織り教室ではこれらの復元機を用いて機織りを行っている。機織り教室では、デザインを考えて設計し、必要となる



写真 11. 下機の織り方見学 (交野市歴史民俗資料展示室) / 12. スピンドル体験 (交野市歴史民俗資料展示室)  
13. 糸枠の説明 (相楽木綿伝承館) / 14. 大和機の織り方見学 (相楽木綿伝承館)

木綿の綿打ちと糸紡ぎをして、出来た糸を草木で染めて織るという一連の作業を全て教室生が自ら行っている。

また、教室で使用する木綿は地域の方々による協力を得て交野市内で栽培・収穫されたもので、材料の調達まで地元で成立している。

見学会で訪問した際は、3月に行われる作品展に向けて作業が行われており、実際に織る作業を見ることが出来たため、下機を使った機織り作業とはどのようなものなのか理解を深めることが出来た(写真11)。

また、小学生等への体験用である厚紙等を材料とした手作りのスピンドルを使用して糸紡ぎを体験させていただいた(写真12)。

市民学芸員にとって初めての糸紡ぎ体験となり、繊維を上手く引き出すコツをなかなかつかむことが出来なかったが、教室生の方がきれいな糸を紡ぎ出す様子を見ながら練習する貴重な機会となった。

見学会に参加した市民学芸員の感想からは、自分たちの館で育てている木綿を布にするまでに必要な工程や、それぞれの作業に必要な道具の多さがわかり圧倒される様子や、「実際に機織りを行ってみたい」という希望が多く見られ、興味関心の高まりが感じられた。

(2) 相楽木綿伝承館  
実施日：10月18日  
参加人数：20名

相楽木綿伝承館(以下、伝承館と略す)は、けいはんな記念公園内に位置する。来館者は、公園利用者や織物に興味がある人または織り手が多いようである。

伝承館で伝承活動に取り組む「相楽木綿の会」は2005年に発足し、2010年より「相楽木綿機織り教室」(以下、教室と略す)を開始した。相楽木綿は、明治時代頃に普段着ではなくよそ行き着として普及したため、現存資料が多く残っているようで、「相楽木綿の会」はそういった現存資料の調査を基に復元作業や伝承者育成、伝承活動に取り組んでいる。

教室では、初級・中級・上級コース、専攻科、研究科とカリキュラムが組まれており、現在教室生は30名以上にものぼる。伝承館には大和機が6台、チョンコ機が3台、高機が2台あり、初級～専攻科がチョンコ機を使用し、専攻科・研究科は大和機を使用する。また、高機は一般来館者向けの体験用である。

相楽木綿は色糸縞と紺による模様が特徴的であり、河内木綿には馴染みのない道具や技法が用いられる。見学では、紺糸を括るための「紺括り枠」と呼ばれる大きな糸枠(写真13)や大和機(写真14)といった道具や、「もじり」と呼ばれるあらかじめ作っておいた糸綜紐にタテ糸を通す作業等を見ることが出来た。

また、相楽木綿伝承館では一般向けの体験メニューが充実している点も参考となった。体験メニューが明確化されており、どのような体験を行うことが出来るのか事前にホー



写真 15. 綿打ちと糸紡ぎの練習

ムページから確認することが出来る。さらに、教室で織られた反物の端切れを使ったグッズが販売されていたり、制作した相楽木綿を用いて作られたエプロンや着物を身に着けられているため、相楽木綿の魅力がよく伝わり、一般来館者へのアプローチ方法として大変参考になった。

### 3.2. 木綿を使う

活動日：12月20日、平成31年1月17日

参加者延べ人数：14名

育てた木綿の収穫は、8月19日から始まり、最終的な収穫量合計は5,858.5gとなった。織ることを目指すに当たって、綿繰り機で種と繊維を分ける「綿繰り」と、綿打ち弓を用いて繊維を解す「綿打ち」、ほぐした繊維を棒状に巻いてジンキを作り、糸車で糸を紡ぐ「糸紡ぎ」までの作業を練習した。

まず、12月20日はこれまで見学を通してそれぞれが知り得たことだけを頼りに、初めて自分たちで道具を使ってみた。実際に作業を行ってみたところ、適切な木綿のほぐし具合や、ジンキにする木綿の量や巻き具合、紡ぎ始める方法等といった様々な疑問が生じた。

そこで1月17日には、交野市歴史民俗資料展示室の機織り教室でも技術指導に当たられている澤田絹子氏にお越しいただき、綿打ちや糸紡ぎの指導を仰いだ(写真15)。12月の疑問点が解消され、練習に集中して取り組むことが出

来た。

### 3.3. 他地域の伝統木綿織物の活動視察

他地域の伝統織物の活用事例を参考とするために、どのような形で実際に伝承活動が行われているのかや、保存や伝承を行う活動に対して市民がどのように関わっているのかといったことについて知ることを目的として、外部有識者と共に視察調査を実施した。

#### (1) 丹波木綿と丹波布

日程：10月25日、26日

参加者：ひろいのぶこ(京都市立芸術大学名誉教授)、甲斐規予子(大東市立歴史民俗資料館学芸員)、筆者

#### ① 福知山市丹波生活衣館

福知山市丹波生活衣館(以下、生活衣館と略す)は福知山城のすぐそばに位置する。来館者としては、福知山城と合わせて立ち寄られる方や、織物関係者、家族連れ等も多いようだ。

まず、館に入って真っ先に目にするのは、6台の高機である。そのうちの2台は展示用の古い高機で、あとの4台は体験用として常時使用可能になっている(写真16)。

体験の内容は、裂織りによる約10cm×10cmのコースター制作である。体験の所要時間は20分～30分で、完成したコースターは持ち帰ることが出来る(写真17)。



16



17



18



19

写真 16. 福知山市丹波生活衣館 / 17. 裂織り体験 (福知山市丹波生活衣館)  
18. 創作館 / 19. 丹波木綿縞帳 (創作館)

様々な色や柄の裂かれた布が色別に整頓して用意されており、まず織りこむための布を2種類選んで裂織にとりかかる。筆者も実際に体験を行ったが、自分で選んだ2色の布が織物になっていく楽しさがあり、お土産としても嬉しい。来館者にとっても満足度が高いであろうと思われる。

また、木綿を育てるところから、収穫した木綿で糸を紡ぎ、植物で色を染めて織った織物をショルダーバッグ等として仕上げるまでの連続講座が行われており、大変人気があるようだ。その他にも、趣向を凝らした様々な講習会が開催され、昔から生活の中で行われてきた手仕事の技を広く伝えることに取り組んでいる。

このような講習会や、同館の展示替えには、「丹波生活衣振興会」(以下、振興会と略す)という市民グループの存在が重要な支えになっているという。この振興会は、もともと「丹波生活衣ギャラリー建設をすすめる会」という婦人市民グループとして、同館の設立に向けて尽力された。収集する資料の整理作業や、展示替えのために収蔵庫から資料を出す作業にも振興会が携わるということであった。

## ②創作館

丹波木綿保存会(以下、保存会と略す)の活動は月～金曜日の9:00～16:00に行われている。保存会は現在11名が所属していて、年齢は40代～70代で構成されている。

保存会は研修制度を設けており、6か月にわたる全24回の研修を修了すると保存会に加わることが出来るようで、

筆者が訪れた時点では3名が研修生として参加していた。

創作館には9台の高機があり、そのうちの3台が広幅だ(写真18)。機は1973年頃から栗枝地区で持ち寄られたが、初めは2、3台だったようである。

保存会は古い丹波木綿のハギレをファイリングしており、柄や糸密度を参考に復元を行っている(写真19)。作品の展示会を1年半ごとに同館または館外で行うそうで、筆者等が訪問した日はちょうど展示会の搬入日であった。

篠山市内の学校による団体見学や、「トライやる・ウィーク」という兵庫県下全域で実施される中学生を対象とした1週間の職業体験で毎年2、3名の受け入れを行っている。

## ③丹波市立丹波布伝承館

丹波布伝承館(以下、伝承館と略す)は、道の駅あおがき内に位置する施設である。伝承館には、丹波布の歴史や色材となる植物の紹介が行われる展示スペースや、伝習教室の制作スペース(写真20)のほか、ショップコーナーや体験コーナーが併設されている。

伝承館では、丹波布の技術を保存・伝承していくため、後継者を育成する伝承教室が行われている。長期教室は、基礎コースと伝承コースからなる合計2年間のカリキュラムで、伝習生としての履修期間を終えた後は専修生として制作に取り組むことも出来るようだ。現在は7名の伝習生と、5名の専修生が技術の習得と制作に当たっている。

他にも短期教室や、糸紡ぎ教室や染色教室といった来館



20



21



22



23

写真 22. 松阪もめん手織りセンター / 23. 御絲織物株式会社

者が気軽に参加出来る体験教室も行われている。

同館の位置する道の駅には、木綿畑が隣接している(写真 21)。この畑に青垣の小学生が木綿の種を植えている。収穫した木綿を用いて枠による織物体験を行ってもらい、自分たちの植えた種が布になるまでについて学ぶことが出来るような取り組みが行われている。

また青垣町では、「あおがき和棉の会」というグループが、地域の農家や畑を持つ人に、片隅で木綿を植えてもらう取り組みを行っている。育ててもらったお礼として、収穫量に応じた代金、綿繰りまで行ってもらえた場合には、その分の作業工賃とを合わせた額を支払い、同額で丹波布の作家等へ青垣産の木綿を提供するというような画期的な取り組みであった。

## (2) 松阪木綿と伊勢木綿

日程：12月16日、17日

参加者：ひろいのぶこ、甲斐規予子、筆者

### ① 松阪もめん手織りセンター

松阪木綿手織りセンター(以下、センター)(写真 22)は、松阪市産業振興センターに位置する。センターは、松阪木綿の商品販売や織物体験コーナーがあり、松阪もめん手織り伝承グループ「ゆうづる会」(以下、ゆうづる会)の活動拠点でもある。

商品として置かれているのは、ゆうづる会で手織りされ

た松阪木綿や、後に訪れた御絲織物株式会社の力織機で織られた松阪木綿を用いて作られたバッグや衣類等といったアイテムが約 850 種類も展開されている。

ゆうづる会は、1981 年より前身の「ゆうづる工房」を開設し、以降約 37 年間活動を続けている。昨年(2017)より 10 年振りに伝承者育成講座を開き、新規会員の募集を始めた。研修生は 4～5 名で、趣味コースと本科コースに分かれる。通常、1cm あたり 19 段以上緯糸が入っていないと厳しい基準を設けて技を磨いているそうである。

講習では 6～8 反織るが、初めは多くの「チェック」がつくという。また、ゆうづる会は、市内の学校に赴いて松坂木綿の文化を伝える取り組みも行っている。

### ② 御絲織物株式会社

御絲織物株式会社(写真 23)は、松阪木綿を作り続けるただ一軒の工場である。製織にはおよそ 100 年前の豊田式力織機が使われ、染色から織りに至るまで一貫して行われている。

10 年ほど前までは経糸が科学染料、緯糸に藍染めを用いた縞柄を作っていたそうだが、現在は経糸・緯糸ともに藍もしくは植物によって染めた糸を用いた縞になった。昭和以降に機械が導入されたが、それ以前は手織りであったという。また、先述の松阪木綿手織りセンターの設立は同社の先代が行った。センターで織られる手織りの松阪木綿は



写真 24. 白井織布株式会社 /25. 技術・研修工房つむぐ  
26. 筋摘み作業 (技術・研修工房つむぐ) /27. 筋摘みに用いられる鉗 (技術・研修工房つむぐ)

同社の縞パターンであり、用いられる糸も同社で染めた糸である。

### ③白井織布株式会社

白井織布株式会社 (写真 24) は、伊勢木綿を作り続けるただ一軒の工場である。伊勢木綿というと、近年では数々の有名ブランドとのコラボレーションを耳にすることが多い。同社で織られる伊勢木綿は、単糸が用いられることによる柔らかな風合いが特徴的だ。鮮やかでモダンな柄が印象的だが、デザインは明治時代の布団縞の縞帳をもとに、伝統色を用いて現代に受け入れやすい配色で展開されている。同社で用いられる機は、先述の御糸織物株式会社と同じくおよそ 100 年前の豊田式力織機であった。

### (3) 赤穂段通

日程：12月22日、23日

参加者：ひろいのぶこ、筆者

#### ①技術・研修工房つむぐ

技術・研修工房つむぐ (以下、工房) は、赤穂段通の後継者を育成する拠点として今年度 NPO 法人赤穂段通を伝承する会 (以下、伝承会) によって開設された (写真 25)。

伝承会は、昭和の終わり頃に赤穂段通の織り手が 1 人となったことから、平成 3 年より赤穂市教育委員会主催で開かれた「赤穂段通織方技法講習会」(以下、講習会) の修了

生によって立ち上げられた。同講習会は、平成 8 年までに 1 期生、平成 8 年から 11 年にかけて 2 期生が修了した。

講習会が始まった当初は機が 1 台しかなかったため、講師の作業を取り囲んで皆で見るようなことを行っていたが、徐々に機の数を増やしていったそうである。

赤穂段通を織るための機は、他の段通が織られるような垂直機ではなく、水平機が用いられる。用いられている水平端は、高機をより大きくして、それぞれの部材も頑丈にしたような仕様であり、構造的には通常の高機と大きな違いはない。ただし、織り進めた段通のヘリを巻くための、網針のような形状をした「オオミマキ」や、横糸を巻くための杼の役割となる「ヨコボウ」などといった独特の道具もある。機だけではなく、段通にも他の段通とは異なった特徴がある。

なかでも重要なのは、「筋摘み」という技術である (写真 26、27)。筋摘みとは、赤穂段通の模様の際目の毛足を短く切ることで、模様の輪郭をはっきりとさせる作業である。

赤穂段通はこの「筋摘み」を行うことによって、経年で毛足が乱れて模様が不明瞭になることもないという。現在、同工房には研修生が使用するための機が 7 台置かれている。研修生には、伝承会の会員 4 名が交替で指導に当たっている。研修期間は 5 年ほどだが、技術を習得するには、10 年ほどかかるといわれている。工房は、創作館と同じく「トライやる・ウィーク」の受け入れも行っている。



写真 28. 桃井ミュージアム / 29. 赤穂市立歴史博物館



## ②桃井ミュージアム

桃井ミュージアムは、赤穂緞通技術・研修工房つむぐから車で13分ほどの場所にある。同館は2018年1月から現代の赤穂緞通作家が制作する赤穂緞通の展示販売を始めており、ホームページから販売作品一覧を見ることが出来る。

代表である桃井香子氏は、ご自身も赤穂の伝統工芸品である雲火焼きの作家であり、工芸品への造詣が深い。館内には桃井さんご自身の自宅で昔から使われていたという古緞通も何枚か展示されており、現代の作家作品と共に見ることが出来た(写真28)。

## ③赤穂市立歴史博物館

赤穂市立歴史博物館(写真29)は「塩と義士の館」という愛称からもわかるように、有名な特産品でもある塩まつわる歴史や、赤穂義士まつわる展示が充実している。

同館には、常設展示にも赤穂緞通のコーナーがあるが、筆者が訪れた際は企画展「第4回新収蔵資料展」が開催中で、新たに収蔵されることとなった4枚の赤穂緞通も見ることが出来た。

今回我々は、過去に田淵記念館において赤穂緞通をテーマとする企画展を二度担当された、現在赤穂市立歴史博物館主査・学芸員である木曾こころ氏にお話を伺うため、同館を訪れた。赤穂緞通は河内木綿と同じく木綿を原材料とするが全く性質の異なる織物で、現代へ伝えられ今も尚使われ続けるほど、丈夫で高価なものである。赤穂段通は堺・

鍋島と並び3大緞通とも言われるほど広く流通したため、現在でも全国各地で古緞通を目にすることがあるが、創始者がはっきりと特定されているため、生産者に関する歴史をたどりやすいことが特徴である。

幕末頃に20年もの歳月をかけて赤穂緞通の製法を確立した創始者である児嶋なかという女性については、現在かなり研究が進んでいる。

## 4. おわりに

今回、河内木綿のアウトリーチ活動に向けて、まずは伝承活動の現状を知ることと河内木綿そのものを知ることから本事業を始めた。

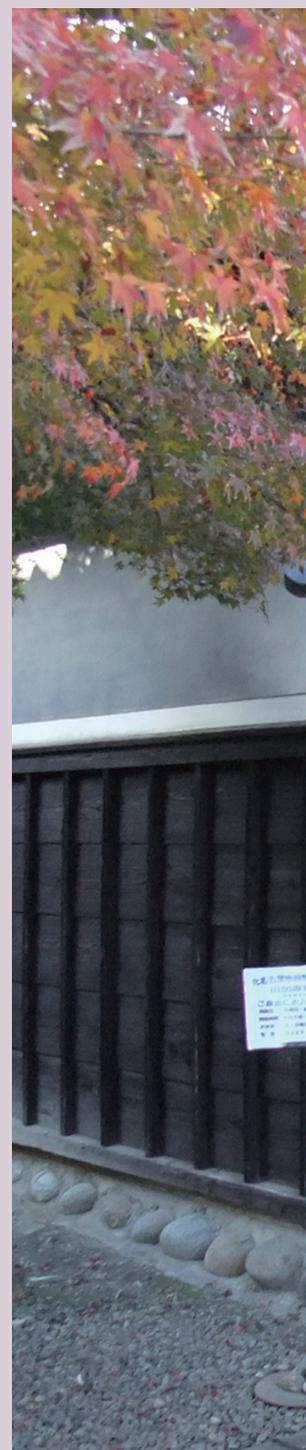
様々な活動事例を調査出来たことで、本事業で取り入れたいことや本事業にはそぐわないと思われること等、様々な気付きがあった。木綿づくりに関しては、今回収穫した木綿を用い、見学会等を通して得た知識を活かして今後作業に取り組んでいくことが出来るだろう。

本事業はまだ始まったばかりであり、アウトリーチの形となるにはまだ時間がかかると思われるが、引き続き取り組んでいきたい。

なお、今後の展望については第3部第2章において紹介しているので、参照されたい。

## 第2部 第2章 アウトリーチとテーマとした学芸員研修 視察報告—回想法を中心に—

アウトリーチの研修を実施するにあたり、視察を実施した。  
小規模館で実現可能なことは何かを念頭に置きながら、二  
地区三施設の方からお話を伺うことができた。





## 第2部 第2章 視察報告—回想法を中心に—

甲斐 規予子

大東市立歴史民俗資料館

森田 拓馬

大東市立歴史民俗資料館

### 1. はじめに

旅するミュージアム事業（以下、本事業）は、博物館の利用が困難な方のために、博物館をこちらから出向いて届けることを目標として始まった。前年度は、高齢者、障害者、小学生と多様な参加者に向けてモバイルミュージアムをデザインし、実践した（※前年度報告の第2部を参照）。今年度はそれらをより深く検討するため、高齢者や障害者を対象としたアウトリーチの視察を行うこととした。特に「回想法（注1）」について国内で早くから取り組まれてきた館を中心に、先行事例の調査を行った。

### 2. 回想法の先行事例調査

視察先：氷見市立博物館

（富山県氷見市本町4-9 氷見市教育文化センター内）

実施日：11月10日（土）

目的：地域回想法への取り組み、民具の貸出

調査者：甲斐規予子

氷見市立博物館は、考古、歴史資料のほか、明治から昭和の頃に使われた身近な生活道具の収集と展示に力を注いでいる館である。また、平成23年頃から民具セットの貸出を始めたり、介護施設職員に向けた回想法研修会の開催を実施したりと様々な形で、地域回想法に取り組まれてきた。

現在は主に民具セットの貸出を中心に運用している。複数のセットが用意しており、この貸出用の活用資料につい

ては、多少乱暴に扱っても壊れないような丈夫なもの、保存状態の良好なもの、複数収蔵するものを選定するようにしている。

民具貸出セットには、それぞれの資料の解説シートが付属している。これは、福祉施設の利用者ではなく、職員に向けた民具解説である。利用者は、実際に見たり使ったりしていた経験があるが、若い職員は民具が何かわからないため、資料1点ずつに用意している。

また、氷見市立博物館の常設展示室内には「さわれる民具コーナー」があり、誰でも常時さわれるようになっている。ものには名称のキャプションが付いており、こちらも耐久性のある資料が展示されていた。

平成28年度からは、新たに「海の地域回想法」に取り組んでいる。氷見の定置網漁に用いていたが、現存しない木造船ドブネを1/2スケールで復元し、建造過程やその記録映像などを元に、漁撈に携わっていた漁師や船大工といった地域の高齢者に「海の地域回想法」を実践してもらう、という取り組みである。氷見市立博物館は地域性の強い民具や、漁撈用具などを用地域回想法に取り組んでおり、それを通じて記録の保存にも繋げている館であった。

視察先：昭和日常博物館

（愛知県北名古屋市長久寺5-3番地）

実施日：12月12日（水）

目的：地域回想法への取り組み、お出かけ回想法の見学



写真 1. 昭和日常博物館 /2. 北名古屋回想法センター

調査者：森田拓馬

昭和日常博物館は平成2年に師勝町歴史民俗資料館として開館し、平成9年には、「日常が博物館入りする時」と題した特別展でフロア全体を昭和30年代の資料で構成し、昭和日常博物館という名称となった。これら昭和時代をテーマとした資料の収集・保存を行いながら回想法という手法で福祉との連携が行われている。特に認知症予防を目的として回想法を地域ケアに取り入れ、継続する「地域回想法」という手法を確立しており、同市内の「北名古屋回想法センター」(後述)等と連携して、地域回想法に取り組んでいる。

回想法支援の為に「回想法キット」を製作し、全国の自治体や高齢者施設への貸し出しを行っている。キットは館所蔵の実物資料、回想法ビデオ、解説書で構成されており、現在は使用目的に合わせて20種類のテーマから選べるようになっている。これら回想法キットや博物館施設を利用して、在宅高齢者や施設入居高齢者へのケアサポートを行う「お出かけ回想法」も行われている。

視察先：北名古屋回想法センター  
(愛知県北名古屋市六ツ師704番1)

実施日：12月12日(水)

目的：地域回想法の見学、回想法施設の見学

調査者：森田拓馬

北名古屋回想法センターは上記の昭和日常博物館と同じ北名古屋市にある。平成14年度、「旧加藤家住宅」に国内

初の「回想法センター」が開所された。65歳以上の方が10人程度のグループを作り、専門スタッフと語り合う「回想法スクール」も開始され、現在もこの施設で行われる回想法事業の核となっている。回想法スクール卒業生が「いきいき隊」というグループを作り、無理なく続けられる範囲での自主的な活動を継続されている。

平成30年度は毎週水曜日の午後2時から「お話しひろば」と呼ばれるオープン回想法のイベントが開かれている。調査実施日には、センタースタッフが火鉢に炭を入れて暖を取れるよう準備され、火鉢にまつわる思い出がテーマの会であった。実際の会では話題は火鉢から離れて、当時の燃料事情などに移っていった。そういった場合も無理に話題を火鉢に戻すことはせず、参加者の会話の流れが優先されていた。スタッフの方が後で仰っていた「民具は会話を促すきっかけ」という言葉が印象に残っている。参加者は現在地元にお住まいの方々だったが、元々は北名古屋市以外の地域出身の方が殆どであった。民具をきっかけに話をする際に地域差が出ることも、「他の地域の事を知れて楽しい」と好意的に受け止められていた。

注1) 回想とは、過去の出来事を思い出すことである。1950年代から60年代にかけて、アメリカ精神科医ロバート・バトラー博士が、高齢者の回想や回想行為には人生を振り返り、現在を、また将来を生きるために積極的な意味があると提唱した。

## 第2部 第2章 アウトリーチとテーマとした学芸員研修 研修報告

「みんなぱっく」開発から学んだこととプログラム開発の要素」  
佐藤優香氏には、講演「博物館におけるコミュニケーションデザイン」と当日話きれなかったアウトリーチに関する論考をまとめていただいた。

「歴史民俗資料のアウトリーチ」  
駒井文恵氏・竜王真紀氏による事例報告1と、福田博氏による事例報告2、そして山内利秋氏の話題提供を受けたのち、ディスカッションに入った。報文は、ディスカッションの進行を務めた宮元正博氏による。

「自然史資料のアウトリーチ」  
坂本昇氏の事例報告1と、平田慎一郎氏の事例報告2、そして剣持悟氏の話題提供を受けたのち、ディスカッションに入った。報文は、昨年度「旅するミュージアム」の実践を報告した西谷美紀氏による。

## 第7回 学芸員スキルアップ研修 プログラム

講演会「博物館におけるコミュニケーションデザイン — 教育プログラム開発のための基本レシピ —」

講師 佐藤 優香氏（東京大学大学院情報学環客員研究員） 14:00～15:00

研修会「歴史民俗資料」のアウトリーチ 15:10～16:10

事例報告1 土山歴史民俗資料館の場合 駒井 文恵氏（甲賀市教育委員会歴史文化財課係長） 竜王 真紀氏（山内エコクラブ代表）

事例報告2 吹田市立博物館の場合 福田 博氏（むかしのくらしと学校展ボランティアの会長）

話題提供 山内 利秋氏（九州保健福祉大学准教授）

ディスカッション

「自然史資料」のアウトリーチ 16:20～17:20

事例報告1 伊丹市昆虫館の場合 坂本 昇氏（伊丹市昆虫館副館長）

事例報告2 きしわだ自然資料館の場合 平田 慎一郎氏（きしわだ自然資料館学芸員）

話題提供 剣持 悟氏（川村義肢株式会社・日本リハビリテーション工学協会理事）

ディスカッション

総括 17:20～17:30

情報交換会（懇親会）

### 講師／コメンテーター紹介



佐藤 優香（東京大学大学院情報学環客員研究員）

博士（教育学）。東京大学大学院情報学環客員研究員。  
博物館における学びについて、歴史と実践のふたつの手法で研究。  
ワークショップやワークシートを数多く手がけ、国立民族学博物館の貸出キット、国立歴史民俗博物館の体験キットなどを開発。日本博物館協会顕賞、日本子ども学会優秀発表賞受賞。

山内 利秋（九州保健福祉大学准教授）

埼玉県生まれ。九州保健福祉大学にて学芸員養成課程を担当。  
高齢者福祉や大規模災害といった地域課題にも対応できる博物館人材の養成を目指しています。  
『学芸員養成における課題解決型教育』（『博物館学雑誌』41-1, 2015）など。



剣持 悟（川村義肢株式会社）

新潟県生まれ。川村義肢株式会社で福祉機器の製造に携わる傍ら、障害者スポーツのサポートも行う。6年前より市民向けに“介助犬のひろば”というイベントを企画し、行政、企業、福祉事業所、資料館など全職種連携を呼びかけ運営し、市内の全小学校3年生に対し出前授業を実施している。

## 第2部 第2章

### 講演「みんぱっく」開発から学んだことと

### プログラム開発の要素

佐藤 優香

東京大学大学院情報学環

#### 0. はじめに

本稿は、今年度、大東市立歴史民俗資料館で実施した研修において、筆者が担当した講演とワークショップの内容をもとに構成されている。スキルアップ研修では「博物館におけるコミュニケーション —教育プログラム開発のための基本レシピ—」というタイトルでアウトリーチプログラムの開発について講演を行った。ここでは、その際に事例として取り上げた「みんぱっく」の開発過程から3つのポイントを取り上げる。そして、講演では時間の都合で話せなかったが、博物館教育プログラム開発の基本レシピとして、デザインをする際に手がかりとなる5つの要素とデザインの手順について紹介する。また、プチスキルアップ研修として実施したワークショップでは、先のデザイン要素をもとに、参加者が自館で実施しているプログラムを見直す試みを行った。ここでは、その取り組みから見えてきた、プログラム開発の現場における課題にも言及する。

#### 1. みんぱっくの開発をふりかえる

アウトリーチプログラムについて考えるために、まずは筆者自身の「アウトリーチキット開発」の経験をふりかえてみたい。事例として取り上げるのは、国立民族学博物館の貸し出しキット「みんぱっく」の開発である。2001年のことなので18年前だ。今ではすっかり定着した感のある博物館教育やワークショップへの関心が少しずつ広がり始めたころではないだろうか。

みんぱっくは、民族衣装や楽器、生活道具などの実物資料がトランクにつめこまれた子ども向けの貸し出しキットで、現在も既存パックのリニューアルや新規開発を重ねて運用されている。貸し出し資料をキット化することにより、学校教育において簡便に実物を活用できるようにとの考えから企画された。開発の初年度には学校を対象にした調査と他館の事例調査が実施された。6つの地域のキットが作成されることになり、それぞれの地域を専門とする研究者がキットの内容について担当した。学校での調査から、民族衣装を借りたいとの要望が高いことがわかり、全てのキットに民族衣装を入れることになった。民族衣装といくつかの資料が納品されるまでが1年目になされた。続く2年目から、筆者は開発メンバーに加わり3年間担当した。

#### 1-1. まずはコンセプト —経営と利用の二視点から

開発の仕事が始めるにあたり、開発メンバーらで学びの視点からコンセプトをまとめた。初年度までに決まっていたのは、地域ごとにパッケージすること、簡便に貸し出しできること、民族衣装を含む実物資料を入れること、解説者は同行せずキットのみで自立して使用してもらえることなどだった。すなわち博物館側から見た運営のためのコンセプトである。そこで、利用者目線のコンセプトとして、じっくり見てモノと対話できるようにすること、学びの素材として媒介のツールになること、利用者が自由に使い方を考えることができる学びのリソースになること、研究成果を



写真 1. 佐藤優香氏

伝えるメディアとして研究者の地域へのまなざしを織り込むことなどがあげられた。利用者にとってどのようなものにしたいのかという議論を経て、利用者向けのメッセージがまとめられた。ウェブページやキットの説明書には、みんなぱくとは「こどものための、持ち運びできる小さな博物館」で「こどもたちが新しい世界と出会い、ふれあうためのカバンです。世界各国、地域の民族衣装や生活の道具など、それらにまつわる情報や解説がパックされています」と紹介されている。

展示会社のプロデューサーと制作スタッフ、デザイナー、博物館の担当者である筆者、パックごとに異なる地域や民族の研究者…と、開発に関わるメンバーは多人数で、時にはメンバー構成を変えて進めていく作業において、最初に利用のイメージをまとめたことはとても有効だった。そのエッセンスは案内文や情報ツールの中に取り入れられている。例えば、利用者に伝えたいことをまとめた「コンセプトシート」を作成することになり、そこにはみんなぱく全体のコンセプトと、各パックならではのコンセプトと研究者からのメッセージを掲載することになった。

#### 1-2. 学習観の共有と再構成 —届けるのは学び

利用イメージのひとつとして、研究者の視点を伝えることをあげていた。それはコンセプトシートへの研究者からのメッセージの掲載や、資料1点ずつを解説する情報カードに、ものの一般的な説明だけでなく研究者の個人的なコ

メントを入れるなどの方法で反映されている。この背景として筆者が考えていたのは、みんなぱくの利用者が地域の情報を受け取って「物知り」になることが主題ではなく、そのパックの利用を通して他文化へのまなざしを学び、「小さな研究者」になることだった。それは、みんなぱくの利用者を主体的な探求者としての学び手ととらえる学習観に通じていた。みんなぱくは「教える道具」というよりもむしろ「学ぶ道具」とあるという考え方は、開発に通底するものとしてメンバーの間にあった。アウトリーチプログラムを「ものを届けること」や「プログラムを館外で実施すること」として企画するのは、博物館側から見た運営の手法にすぎない。それだけでは、利用者にとって何をもたらしのかのコンセプトが不在である。アウトリーチプログラムを「学びを届けること」ととらえれば、学習観を共有することは肝要であるだろう。とはいえ、一般的に博物館の教育プログラム開発の過程において学習観の共有はどのくらいなされているだろうか。筆者がさまざまな場面で出会う博物館教育の関係者間のやりとりを思い返す範囲では、必ずしも学習観を組み立てていくような議論がなされているわけではないのではないかと想像する。みんなぱくの開発を振り返ると、どのような学びを実現したいのかを確認し、その価値観を共有し、かつ共に再構成しながら進めることは、とても大切なのではないかと考えられる。



写真 2. みんなぱっく厨房におけるコンセプトのマッピング 参加者の作品例より

### 1-3. 開発過程を開く – 文化を創造する共同的な学びの場

みんなぱっくの開発における特徴的なこととして、開発プロセスを館外に開いていたことがあげられる。筆者は、開発に携わる研究者、展示会社スタッフ、デザイナー以外にも学校の先生や教育学研究者らともみんなぱっくの開発について話をする機会を持っていた。学校の先生たちには実際の利用について話を聞いたり、資料を教室に持ち込んで児童生徒らと試用してもらったりした。また、コンセプトづくりや教材開発手法などについて、教育学研究者らにたびたび相談をしていた。それぞれ別の機会に会っていた人たちが一同に会せば、より深く興味深い議論ができるのではないかと考えて企画したのが「みんなぱっく厨房」だった。まだまだ素材の段階にあるみんなぱっくをみんなで料理する場であることと、みんなぱっくとは学びの素材であり利用者それぞれがみんなぱっくを料理しながら使うことを会のコンセプトとし「厨房」と名付けた。

みんなぱっくの企画を取りまとめている研究者と事務スタッフに研究会兼会議の開催を相談し、非公式な場ではあるが館内の一部屋を使って休日に手弁当で参加してもらう会を開くことになった。第1回目のプログラムを見てみよう。まず「ごあいさつ『みんなぱっく厨房』がめざすもの『みんなぱっく』がめざすもの」と題して筆者がみんなぱっくのコンセプトについて話をしている。続く「『みんなぱっく』をさわってみよう」で、開発途中のみんなぱっくのお披露目をした。そのあと、パックを担当する研究者の話、デザイナーによ

る開発話、教育学研究者から総合的な学習の時間についての話と続き、全体で議論する時間が持たれた。

さまざまな立場の人がみんなぱっくについて意見を交わし、企画や利用のアイデアを共有し創造する場になることを企図していた。そこで、学びのイメージが伝わり、みんなぱっくをその人なりに解釈してもらえて、活発な議論が起ころ場になるように場のしつらいや道具に工夫を凝らした。座席は教室型の1対多数の配置ではなく正面のない口の字型にし、常時みんなぱっくを広げておけるスペースをすぐ脇に用意した。また、参加者各自がキーワードを元にコンセプトを整理していけるようにキーワードを印刷した小さなカードとそれをレイアウトして貼ったり書き込んだりするための白紙を用意した。これら全てを厨房や食事の場のイメージでデザインしてしつらえた。結果として会議や研究会というよりも、ワークショップと呼ぶのがふさわしい場になっていた。第1回目は、開発のメンバー以外に教育学研究者2名とそのゼミ生ら、担当になっていない館内研究者3名も参加し盛会となった。初年度に3回開催されたが、年度末の回では試行実践をした教師らに出張依頼を出して実践報告をしてもらうことができた。

2年目は、運用方法そのものを吟味する試行も行なっていたので、知り合いへの口コミから始まった試行が一般利用者へも広がりを見せた。そこで、より利用の流れに着目した内容でみんなぱっく厨房を企画した。また、遠足での訪問から利用につながった小学校教諭に参加してもらうな

ど、参加者の輪が広がった。中身の検討から利用の検討へと、企画における議論が変わっていくなかでも開発のためのワークショップは、みんなづつを形づくりと同時に学びを組み立てる場として活かされていた。

自館の内外に企画のプロセスを開くことが、多様な声に耳を傾けながら開発していくということにおいて有効なのは想像に難くないだろう。近年では、表象する者、表象される者、鑑賞者という展示における三者が共に議論しながら展示がつくられることもあるし、市民が企画に参入する試みも目立つようになってきている。今改めてみんなづつ厨房を振り返ることで、「共に創る」は企画を多様な視点で支えると同時に、企画に関わる人材を育成する場としても大いに有効であることも指摘しておきたい。毎回のワークショップのたびにアウトリーチキットとは何か、みんなづつの何を共有し何を議論したいのかを筆者は思考した。その度にその考えをプログラムやそのワークで使う道具に反映させ、多人数の前で話をした。何よりも育てられたのは筆者自身なのである。また、2年目から新しく事務スタッフがみんなづつの担当者として加わったが、彼がみんなづつを理解し、共に創造する仲間として成長していくのにも効いていたように思える。

加えて、開発プロセスを外化することは「みんなづつ開発」という文化を創造していたのではないかと思う。業務としてのプロセスが、文化創造のプロセスに昇華するとき、企画の内容以上の何かをもたらされているのではないら

うか。このことについては、開発プロセスの研究という視点で実践の場に携わりながらこれからも観ていきたい。

## 2. プログラムの開発をモデル化する

みんなづつの開発時、筆者はまだ経験が浅く、プログラム開発の方法もモデルも持っていなかった。子ども向けの展示を多く手がけてきた展示会社のプロデューサーや、博物館関連のデザイン経験が豊富なデザイナーら、開発メンバーに支えられながら手探りでその方法を探りながら進めていた。その後、プログラムやキット、ワークシートなど、博物館の学びに関わるさまざまな企画を手がけるようになる中で、プログラム開発のモデルを自分なりに作りながら考えるようになった。その際に参考にしているのが学習環境デザインの研究蓄積である。

2005年に出版された『未来の学びをデザインする—空間・活動・共同体』はそのタイトルにあるように、学びのデザインを空間、活動、共同体の3つの側面から解説している。博物館のプログラム開発では道具自体をデザインする場合もあること、これまでの企画の経験からコンセプトが重要であることを実感していることから、上記にその2点を加えて5つの要素で博物館における学びのデザイン要素を整理している。

# プログラムのデザイン要素

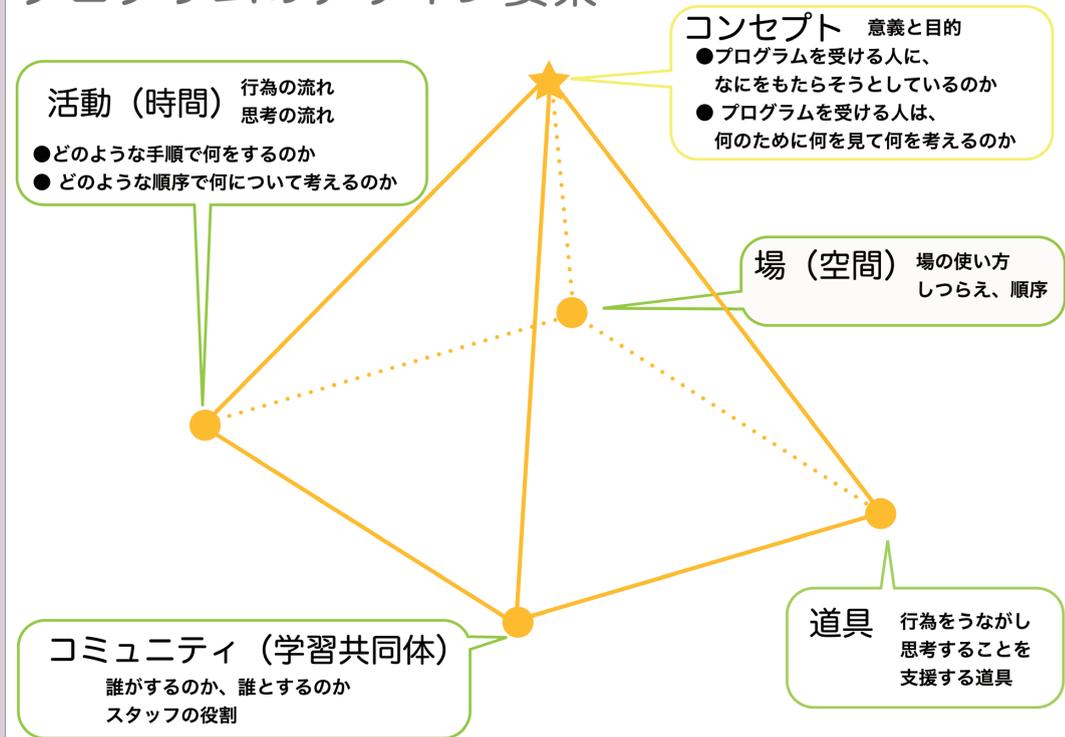


写真 3. プログラムデザインの5つの要素

## 2-1. プログラム開発の要素

筆者がプログラム開発について説明する際に活用しているデザインの要素を紹介しよう。プログラム開発の要素は5つに分けて整理されている。その5点とは、コンセプト、活動、道具、空間、共同体である。それぞれについて詳しく見ていこう。上記書籍では、長期間にわたる学習プロジェクトを事例にしている。デザインの要素として同じ言葉を使っているけれども、必ずしも筆者の考えるデザイン要素と全てが一致しているわけではないことを断っておきたい。

### 〈コンセプト〉

そのプログラムの核となる考えのことで、プログラムを受ける人に何をもちたそうとしているのかをまとめたものである。プログラムを受ける人は何のために何を見て、何を考えるのかを言葉でまとめることで、プロジェクトを企画する人たちが共有することができる。コンセプトをさらに絞り込んで、テイクホームメッセージとして一言で表すことも企画の際に有効である。

### 〈活動〉

活動のデザインとはすなわち、時間の流れを考えることである。参加者または利用者がどのような手順で何をするのか、どのような順序でどのようなことを考えるのかという行為と思考の流れを組み立てておく。実際には予定通りの行為や思考にならないこともあるが、状況を予想し、組み

立てを考えることは、それが道具のデザインや展示のデザインなどを成果として形にする場合にも有効である。企画者は、参加者・利用者が活動しているシーンを頭に浮かべながら企画をしていくことが肝要である。

### 〈道具〉

ここでの道具とは、参加者や利用者の行為をうながし思考することを支援する道具のことであり、ワークショップで使うハサミや紙などの文具や材料を指すこともあれば、開発の対象となるワークシートやキットを指すこともある。企画の成果が道具の場合、それを形にすることに意識がいきがちだが、開発プロセスではどのような行為やどのような思考を意図しているのかを議論した上で、道具としての成果についての吟味が必要である。例えば、どのようなワークシートのデザインにするのか、色は？形は？設問は？ということから始めるのではなく、利用者がどこで何をして何を考えるのかを議論した上で、そのために有効な色や形や設問を吟味するということである。

### 〈空間〉

空間とは、場の使い方、しつらえを意味している。展示の企画の場合は、空間のデザインが成果としてあらわれる。展示に合わせたワークシートの場合は、どの空間を活用するのかの取捨選択になることもある。ワークショップなどで机や椅子、道具類をレイアウトすることが空間のデザイ

時間の流れ			プログラム（展示・出前・ワークショップ・実演）のタイトル	
プログラム/ 展示の内容	子どもが経験する こと	子どもが思うこと、 考えること	"洗たく体験"	
<p><b>導入</b></p> <p>洗たくの体験を用く</p> <p>昔の洗たくをふりかえり</p> <p><b>展開</b></p> <p>洗たく板のながさや厚さを使い方を考えるのがグループでは体験あり</p> <p><b>まとめ</b></p> <p>早くたぐらうにコツをきく</p> <p>洗たく板の形のうちがいが何故あんなかを考えさせる</p> <p>洗いすばいを実現する</p> <p>道具のおもひで形のうちがいにきく</p>	<p>せんたくきの中で洗い→すすぎ→脱水の行程があることを思い出し直す。</p> <p>簡く</p> <p>体験あり</p> <p>体験を言葉にしてふりかえり</p> <p>考え</p> <p>理由を考へ言葉にする</p>	<p>せんたく板以外のせんたく方法にきく「たたき、など」</p> <p>どうすれば早くできるといいうと工夫する</p> <p>導入で話した洗たくすべ→脱水で、たたきなどの方法などを試す</p> <p>形の意味が何に注目した</p> <p>形の意味を日ご理解させる</p>	<p>コンセプト</p> <p>道具の形とその機能の関連性に気か</p> <p>洗たく板以外の道具において形に注目し、その機能を考えか</p> <p>単元「むかしのくらし」における位置づけ</p> <p>せんたく板のいろいろ</p>	
			<p>コンセプト</p> <p>時間のデザイン</p> <p>道具のデザイン</p> <p>コミュニティのデザイン</p> <p>空間のデザイン</p>	<p>道具</p> <p>せんたく板 (60)</p> <p>タレ</p> <p>たらい (60)</p> <p>せんけん</p> <p>ぞうきん (まこいたもの)</p> <p>干すところ</p>
			<p>コミュニティ</p> <p>先生 (子どもの指示)</p> <p>堂員 (解説+体験指導)</p> <p>市民堂員 (補助など)</p>	<p>空間</p> <p>教室 (水場のあまこ)</p> <p>カラサト ( )</p> <p>60グループが作業できる場</p> <p>干したものがみれる場</p>
			所属	名前
				3

写真 4. プログラム開発を振り返るワークシート 参加者の記入例より

ンとして考慮の対象となる。机や椅子の高さなど細かく注文をつけることが可能な場合もあれば、既存のものをいかに配置するかという場合もあるだろう。

#### 〈共同体〉

そのプログラムを誰がするのか、誰とするのか、そこでのスタッフの人数や役割など、対象となる人について考えることが必要である。対象となる年齢や人数を絞ること、一人での活動なのか、複数人で進めるものなのか、スタッフはどのように介在するのかなどの詳細も含んでいる。

#### 2-2. 実際に企画するために プログラム開発の手順

上記の要素はひとつずつ切り離して考えられるものではない。利用のシーンを創造しながら、それぞれが絡まり合ってイメージされ、プログラムが形づくられていく。条件としてコンセプトが定まっている場合もあれば、参加者やスタッフの数が決められていることもあるし、空間や時間に制限があることもある。企画する順序は、こうした条件の整理から始まり、コンセプトを明確にしながら、活動の流れを考え、そこに必要な道具や理想的な空間利用を考えてまとめていくといいだろう。ワークショップの場合は「時間の流れ」が目に見えるものとして表されることになるし、キットやワークシートなどのツールの場合は「道具」が、展示会は「空間」が成果となる。成果として表現するのはそれぞれのうちのいずれかだけになるだろうが、開発の過

程においてそれ以外の要素についての議論を欠いていると、プログラムの全容がイメージされておらず、実施するときにはプログラムが不十分であることに気付かされるだろう。

また、上記の5つの要素を手がかりにプログラムを組み立てるにあたり、資料を活かした博物館ならではの学びを考えるためにはいくつかの考慮すべき視点がある。例えば、資料との「出会いのデザイン」や、それを鑑賞するための「味わいのデザイン」は重要である。また、利用者・参加者には馴染みのないテーマの場合、テーマを自己の経験と結びつけるためのモチーフの設定なども配慮したい。これらは活動のデザインの中に含まれ、ときには道具のデザインに反映される。

#### 2-3. 5つの要素を開発に活かす試み

「むかしのくらし」をテーマにしたブチスキルアップ研修において、上記の5つの要素を活用したワークショップを実施した。プログラムを開発するときに活用する5つの要素を企画の振り返りと検証にも活用することで、企画のブラッシュアップを図る試みである。要素ごとにプログラムの内容を記入するワークシートをデザインした。参加者は、自館ですでに実施されているプログラムの内容をシートに書き込むことで、自らの企画の詳細が整理されると予想した。

このワークショップの実施によって、博物館のプログラム開発において、現場では何をどうデザインしているのか、

何がデザインされていないのかが見えてきた。活動の流れをことさらに分解してデザインすること、参加者の思考を予想することなどが企画段階で考慮されていないケースが課題として浮かび上がってきた。また、コンセプトを吟味する視点の必要性も見出された。5つの要素によるデザイン以外にも、現場が抱える課題がいくつも見出された。この件については今しばらく取り組みを継続させて、議論を深めたい。

今回のシートを再考して、企画や検証に使うことのできるワークシートをデザインすれば、開発のための手がかりを広く届けることができるだろう。同時に、その背景にある考え方も伝えていく必要があると考える。

### 3. むすび ー学び創造するコミュニティづくり

最後に、アウトリーチキットの開発に視点をもどして、その開発を行う共同体について考えてみたい。アウトリーチプログラムを「ものを届ける、外でプログラムを実施する」という考えから進んで、「学びを届ける、ミュージアムとともに文化を創造する営みを拡張する」と捉えて開発することを提案したい。そのためには、企画のプロセスをミュージアムの内外にひらいて、企画者もその周囲にいる人たちも共に成長しながら文化を創造する共同体として育ていくという意識を持つことが大切なのではないだろうか。多くの人に関わる場では、共に目指すものが明確でなければプログラムは迷子になってしまうし、ときには共同体の崩

壊を招いてしまう。そのために重要なのがコンセプトであり、学習観の共有だろう。

本稿では、プログラムを開発する手がかりとなる要素を駆け足で紹介した。言葉足らずであるし、これはあくまでも一例にすぎない。実践を通してそれぞれの共同体にあった開発のモデルを組み立てていけばいいのではないかと思う。また、コンセプトや学習観も、その過程において見直されたり、変化させたりしてもよいだろう。

一年後に完全実施がなされる学習指導要領の改訂は、博物館教育の関係者間でも関心が寄せられている。本稿で取り上げたみんぱっくの開発が始まったのは2000年、筆者がメンバーに加わったのが2001年、試行運用が始まったのは2002年だった。これはちょうど新学習指導要領の移行期だった。この改訂により新設された「総合的な学習の時間」ではテーマ例として、環境、国際理解、情報、福祉・健康などがあげられていた。みんぱっくは教科書との結びつきは見つけにくい、総合的な学習の時間とはとても相性がよかった。開発の過程で多くの教師らに関わってもらい、授業での利用の様子もいくつも見学させてもらったが、その事例の多くが総合的な学習の時間における活用だった。学習指導要領の改訂の話題といえば、みんぱっくの周辺ではいつも総合的な学習の時間の話であり、それは何を取り上げるのかという学習内容の話が多かった。それからおよそ20年が経ち、博物館教育やアウトリーチの話題がより広くなされるようになってきた感がある。そして、今回の

改訂において博物館教育を取り巻く話題としては「主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)」に関心が集まっているような印象を受ける。これは、博物館でどう学ぶのかといった博物館の学びについての議論を深める好機ではないだろうか。

プログラムをつくりたい人たちとプログラムを届けたい先にいる人たちが学びについて語り合い、アウトリーチプログラムを企画しながら文化をつくるプロセスにみんなが巻き込まれていく。アウトリーチプログラムがより興味深く意義深いのは、博物館から出向いて行くことで、博物館に行くことが困難な人もその共同体に関わることを可能にするという点だ。創造的な学びの循環に誰もが身を置くことの可能性をアウトリーチプログラムの開発は保持している。

参考図書：本稿の実践の背景にある考え方をもらった先生方の著作

上田信行、中原淳『プレイフル・ラーニング』三省堂 2012年

美馬のゆり、山内祐平『未来の学びをデザインするー空間・活動・共同体』東京大学出版会 2005年

吉田憲司『「文化」の発見ー驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店 1999年、『文化の「肖像」ーネットワーク型ミューゼオロジーの試み』岩波書店 2013年

## 第2部 第2章 研修会 「歴史民俗資料のアウトリーチ」

宮元 正博

池田市立歴史民俗資料館

事例報告1：ふるさと絵屏風の取り組み

報告者：駒井文恵（甲賀市教育委員会文化財保護課係長）  
竜王真紀（山内エコクラブ）

研修会最初の報告は、土山歴史民俗資料館で、田植えスタイルでの発表（写真1）が参加者の目を引いた。この衣装は駒井氏の祖母の遺品とのことである。またモンペは聞き取りに行った際に地域の「おばちゃん」が「よかつたらつこうて」とくださったものだそう。このあたりからも、いかに地域に密着して活動しておられるかがよくわかった。



写真 1. 駒井文恵氏（左）・竜王真紀氏（右）

さて、本題だが、駒井氏、竜王氏の報告の軸になったのは地域回想法という手法だった。そのきっかけになったのは、寄贈の申し出があっても収蔵場所がなく、受け入れを断らざるを得なかった民具、そのままでは処分されてしまう「これまで頑張ってきた民具」に光を当てたいというものだったそう。そのとき出会ったのが山内エコクラブで、市からの交付金で実施する市民協働提案事業として、記憶文化財を活用した地域博物館プロジェクトをたちあげたということだった。この事業では、地域博物館づくりのためのマインドマップや、協働事業のスキームが示されているということも興味深い点である。

特に、協働事業のスキームでは、甲賀市歴史文化財課と山内エコクラブのそれぞれの役割、および共通で取りくむ課題が明確にされており、そこからは市歴史文化財課は学術的知見からの助言や民具の提供など、どちらかというバックアップ的な役割で、活動の主体は山内エコクラブであることが読み取れた。

市民協同事業は行政と市民それぞれの優れた部分、足りない部分を補完しあいながらよりよい取り組みにするというものであるが、この事業でメインになったのは地域の方がたが描かれた「ふるさと絵屏風」（写真2）の作成だということだった。これは、高齢者の故郷の記憶を絵にしたもので、滋賀県立大学の上田洋平氏が提唱されているものだろう。字が6つある山内地地区では、平成28～29年にかけて、6枚の屏風ができた。聞き取りに何年もの時間を



写真 2. 山内ふるさと絵屏風

費やして描かれたこの屏風は当初、美大生など、絵の専門家に描いてもらおうという案もあったそうだが、最終的には「地元のおっちゃんたち」によって描かれた。元大工さんや元設計士さんなど、それぞれの特技を活かした結果、専門家では出せない味のある絵になっていた。この屏風は、企画展や出前授業などで活用されているということだが、駒井氏が言われた「この絵からは貧しくも暖かく、人が助け合って暮らしていた、そして自然豊かな風景がうかがえるし、一日中体を使って一生懸命生きていたっていう時代をうかがうことができる」というのは、おそらくこの絵を見た人が共通して感じることはないだろうか。地域のことを知る素材を地域の人の手で作るという取り組みは、作り手側にも受け手側にも、メリットの大きいものだと感じた。

この地図はもちろん、「地域回想法」にも役立つ。そもそも回想法というのは、高齢者が、昔使っていた生活道具や当時の写真、音楽などに触れ、経験や思い出を語ることで、人生を再評価したり、人間関係を作ったりしながら心の安定を図る心理療法の一種である。地域回想法はそこに「地域」を取り入れて、認知症予防、介護予防だけでなく、地域づくりに生かすことができるというもので、従来の「療法」としての回想法とは少しスタンスが異なっている。高齢化が進む中、地域の価値を向上させ、福祉や教育、観光など、さまざまな分野と連携することで誇りと自信を取り戻し、未来に夢を持てる地域を作るという試みは、現代

日本の広範囲で応用できる事例なのではないだろうか。

事業の成果と波及効果(写真3)についても報告があった。成果として、先に述べた絵屏風は、参加された高齢者の方がたに役割をつくと同時に、「わしらにもこんなことができるんや」という自信を与えるものになったが、この活動は市内の他の地域に広まっており、山内地域の方がたが、他地域の絵屏風を支援するということもあったようである。屏風を通じた「記憶文化ネットワーク」は、地域の記憶を伝えるという文化的な意義を持つだけでなく、高齢者の活躍(活動)の場を広げ、新たな人間関係を構築する場にもなっているのは間違いないだろう。この点が「地域回想法」のポイントなのだと思う。

2018年11月に氷見市中央公民館で開催された第43回日本民具学会大会の内容についてもふれた。この大会のテーマは「民具の活用と地域回想法」だったが、その中で、介護老人保健施設アルカディア氷見の施設長である脳外科医・長谷川健氏が、「触感であるとか、視覚であるとか、いろんな五感を刺激することで脳の活性化につながる」ということを発表されたそう。回想法について、博物館学芸員などといった専門外の人間は、その効果に対してあいまいな部分を持ちながら行っていることもあると思うが、医療従事者からこういった話が出るということは、回想法を実施する上での後ろ盾として心強いものだと思う。この時の長谷川氏の言葉として紹介された「人は思い出の中で生きている、人は思い出とともに生きている、人は思い出を作

## 平成31年度協働事業

### 1、山内にとどまらずに市内に啓発・波及するにはどうするのか？

- ①山内での語り部育成
- ②市内全域を対象とした「地元学・出前講座」開催
- ③関心のある地域〔要請を受けて〕に対する直接支援  
〔絵にするのか？冊子にするのか？活用？の確認〕



### 2、地元振興会との関わりは？

平成23年度から自治振興会の地域課題の解決策として「名人発掘事業」があり、この名人発掘事業の成果を「ふるさと絵屏風」に活かす。振興会とは常に連携。

NPO山内エコクラブ 3

写真 3. 発表スライド

るために生きている」というのはとても印象に残った。

次年度以降は山内地域だけでなく、市内の他の地域に啓発、波及させるにはどうしたらよいか、自治振興会とのかわりをどう深めていくかということとともに、文化財セクションだけではなく、学校教育、福祉医療、観光、人権など異分野の関係者にも活動を知っていただき、活用の可能性を広げていくとのことであった。今後の動きにも注目していきたいと思う。

事例報告2：特別企画「むかしのくらしと学校」展にかかわる出前授業

報告者：福田 博（吹田市立博物館ボランティアの会）

二つ目の報告は、吹田市立博物館の「むかしのくらしと学校」展と出前授業にかかわるお話で、博物館、吹田市教育委員会、吹田市小学校教育研究会社会科部の博学連携のお話でもあった。なお、吹田市立博物館ボランティアの会のメンバーは一般公募と学芸員体験講座受講者、大学生だそうである。様々な行事や学校からの見学、出前授業などで日ごろから博物館を支えておられる。

ボランティアの会は、博物館で開催される特別企画「むかしのくらしと学校」展に平成11年度から取り組まれているということなので、もう20年ほどやっておられることになる。平成13年からは学校からの要望を受け、さわる・体験するというコーナーを導入し、解説ボランティアも導入したということだった。

見学の実施にあたっては、先生用に見学のしお리를作り、学校の先生たちに一度は展示を見てもらってから学校の方から見学の計画書を出してもらったのち、児童を連れて来館していただくというスタイルだそうである。とても効率のいい方法だと思った。また、事前学習、事後学習に役立つような小冊子も作っておられる。小冊子の中身や説明の言葉は時代に合わせて、子どもたちに身近な言葉に変えているとのことである。子どもに理解できる言葉で説明するというのはとても難しいことだと思うので、そこに取り組



写真 4. 福田博氏

んでおられるということからも、熱心に活動されていることが伝わってきた。

見学についての改善点などは、前年度のアンケートをもとに考えていくそうで、福田氏によると、先生方がこの特別企画展に参加してどういう風にしたのか、どういった風にしてほしいのか、そして子どもの意見・感想を受けて、博物館として、もしくはボランティアの会としてリプライするという、双方向のつながりを大事にしたいとのことであった。「むかしのくらし」は、小学校3年生のカリキュラムに含まれ、12月～2月ごろにかけて全国の歴史民俗系博物館で取り上げられるテーマである。しかしながら、担当する学芸員は、教科書や副読本、学習指導要領などには目を通して、現場の先生がどういったことを求めているかについて、よくわからない場合も多いので、こういった情報収集をボランティアの方にやっていただけるというのは、とてもありがたいことだと思う。

出前授業は、「あかりの移り変わり」というプログラムで、1回の授業が45～50分、学芸員と元学校教員の博物館職員、実際に授業を行なうボランティアメンバーで実施されているということだった。実施時期は基本的に12月に設定され、見学が立て込む時期とずらしてあるそうだ。授業の内容としては、先人たちの苦労や努力があって現在の明るさがあることを学んで理解するというものである。まいぎりでけむりや火打石・火打ちがねを使って火花が出るところ見せたり、ろうそく 燈明、あんどん 行燈、ろうそく、石油ランプから白熱灯、蛍

光灯、LED という電気の明かりへの進化を知ってもらうとのことだった。

今後の課題としては、博物館として学習指導要領の改訂に合わせた中身の更新と、学校連携の対象を中学、高校にも広げていくことが挙げられていた。ほかには、3年生200人を超えるような学校の見学を受け入れた時、どのようにプログラムを変更するかや、体験して、ただ「楽しかった」だけで終わらないようにするために、その時だけでなく、事前・事後を深めていきたいというお話もあった。「楽しかった」や「昔は不便だったけど、今は便利になってよかった」で終わってしまうということは、昔のくらしの体験学習や出前授業でよくあるケースだ。これはおそらく、他館でも苦労されていることかと思うので、この点について情報を共有できれば、非常に有意義なのではないかと感じた。

全体としては、学校教育にかかわっていた方（元校長先生など）といっしょに活動されているということで、学校との連携、子どもたちへの対応の仕方などのノウハウが蓄積されていっているように思った。



写真 5. 山内利秋氏

話 題 提 供：地域包括ケアシステム

「住み慣れた地域で最期まで自分らしく暮らすために」

コメンテーター：山内利秋（九州保健福祉大学）

山内氏が注目したのは、土山・吹田のどちらの取り組みも、出番と役割ができることで、高齢者が地域社会との新たな関係を築き、自信と誇りを取り戻すことができるという点だった。どちらも、高齢者の方を巻き込み（という用語弊があるかもしれないが）、地域の中でさまざまな活動することで、高齢化であったり、人口減少や少子化であったりといった地域課題に対応し、ここに博物館がどのようにかかわれるか、という点が共通しているということだ。

次に、保健福祉分野といっしょに活動する際、重要になってくるのは、個人情報保護の観点から、聞き取りなどで得た情報をなぜ残すのかということの説明し、情報を残すということに対する理解を取っておくことだというお話が出た。また、その際、活動の効果に対する裏付けとなるものが必要性になるという指摘もあった。これについては、博物館ではなかなかできないので、保健福祉系の大学などの専門家に入ってもらわなければならないということだった。確かに、聞き取りにあたり、性別や年齢、出身地などといった、インフォーマントの情報がなければ、せっかく聞いた話の「資料」としての価値は落ちてしまうが、生活の話を取り取る場合、個人情報が含まれる可能性は高くなるを得ないだろう。昨今の社会情勢を考えれば、このことは共通認識として持っておく必要がある。

また、回想法などを行う際、有効性（エビデンス）を担保することも必要だという指摘があった。事例報告1でも述べたが、博物館が回想法を行なう際には、なぜそれを行なうのかという目的を明確にしておかなければ、上司や組織上層部の理解を得られない場合がある。そこを博物館が丸抱えするのではなく、医療や社会福祉の専門家に入ってもらわなければならない、他分野との連携を考えてほしいというのが山内氏のコメントだった。

なお、地域回想法や民具を利用した回想法については、文末に挙げた参考文献に詳しく書かれているので、ご興味のある方はご一読されたい。

#### ディスカッション

ディスカッションというよりは質疑応答の場になってしまった感があったが、現場からの具体的な質問が多く出た。

まず、吹田市立博物館への質問がいくつか出た。

Q. 博物館に来館する学校の数や、学校がどういう交通手段で博物館にくるのか、見学の時間はどれくらいを見込んでいるのかについて教えてください。

A. 交通手段は学校によって変わります。近隣の学校でしたら徒歩です。電車に乗って、駅からは歩いてくるという学校もあります。阪急の南千里からは、子どもの足で徒歩30分くらいです。一番児童数が多い学校は2日に分けたり、別の学校ではバスをチャーターして来館しています。アクセスのよくないところからは出前授業の依頼が入ることが



写真 6. ディスカッションの様子

多いです。以前は給食までに帰る学校が多かったのが、お弁当を持ってきてもらうことで滞在時間を長くしてもらうことができるようになってきています。ただ、時間に関しては学校が決めることなので、事前に相談しています。

Q. 学校に対して、博物館からの要望も含めて説明会を行っているということですか？

A. そうです。12月の中頃に先生を対象にした説明会をしています。そのあと、先生に展示を見てもらい、前年度のアンケートなども見てもらいながら、どうするかを相談します。先生の理解を深めることで、子どもたちが来館したときにより深く学習ができるようになるのではなかと期待しています。

Q. ボランティアの増員と、幅広い年齢層の確保について、どういう取り組みをされていますか。

A. まずは博物館のホームページで参加を呼びかけたり、各種イベントの開催時に宣伝をしたり、吹田市報に掲載してもらったりするようにしています。ほかには、博物館が実施している学芸員の体験講座の卒業生に残っていただくということもしています。体験講座のあとは、受講した内容を発揮できる場がほしいという思いが高まっているときです。いい機会です。特別企画展の実施期間中に関しては、近隣の大学や吹田近隣の学生にその間だけきてもらうこともあります。学生は卒業したら就職して、ボランティアにこられなくなってしまうので残念ですが、卒業後は博物館関係の仕事に就く人がいますので、ここで学んだことが少

しでも役に立てばうれしいと思っています。

土山歴史民俗資料館に対しては次のような質問があった。

Q. ボランティア団体と自治体の組織が協力するようになったきっかけは何ですか。

A. 山内エコクラブは元々、自然系の博物館と連携されていましたが、その中で高齢者の話を聞き取りをしているのを聞かせていただいたことがありました。同じ土山で活動されているので、なにかお役にたてることあるかもしれないと思ったことがきっかけだったと思います。市の組織に対しては、ボトムアップのような形で始め、それから上を目指してきたという感じです。真向からいくと話が通らないところでも、下から攻めると話が通じるというように感じて、今に至るというところです。

質問も議論もまだまだ続きそうな雰囲気ではあったが、この時点で定刻となっていたこともあり、以上でディスカッションを打ち切り、「歴史民俗資料のアウトリーチ」は終了となった。

#### 【参考文献】

遠藤英俊 / 監修、NPO シルバー総合研究所 / 編集 『「地域回想法」ハンドブック 地域で実践する介護予防プログラム』 2007年 河出書房新社  
 岩崎竹彦 / 編 『福祉のための民俗学—回想法のスミ—』 2008年 慶友社

## 第2部 第2章 研修会 「自然史資料のアウトリーチ」

西谷 美紀

灸まん美術館

### 1. はじめに

学芸員スキルアップ研修会では「歴史民俗資料」に続いて「自然史資料」のアウトリーチの報告を受けた。事前に参加者リストをみると、歴史と自然史系の関係者が多くみられたが、文学館や記念館、そして私のように美術館の学芸員も参加しており、様々な分野からの関心を集めていたようである。

#### 事例報告1：伊丹市昆虫館の場合

報告者：坂本 昇（伊丹市昆虫館副館長）

伊丹市昆虫館の事例では、坂本昇氏から地域への出前、標本や資料の貸出、市街地への連携事業、他施設への出展など様々なアウトリーチ活動のなかから学校園への出張授業について詳しく報告を受けた。伊丹市は、行政主導で環境教育を推進しており、開館以来コンスタントに積極的なアウトリーチ活動を続けている。最近の傾向では、小学校だけでなく幼稚園への出前も増加し、需要の幅が広がっている。プログラムの内容は①昆虫とふれあい体験 ②野外での昆虫観察 ③昆虫の冬越し ④こもまき、こもあけをメインしている。野外の虫とりの活動は、実際に生きている虫を捕獲することで、虫の生態や周辺環境を知り、様々な状況を自分で考えるようになる。むやみに探すのではなく、2回3回と失敗と成功を経験することで虫の生息地を予測できるようになり、新しい虫の数だけ関心が強くなるという利点をあげている。また、屋外に行くだけで活

動ができ、準備物が少ないという点にもアウトリーチのなかでも大きなメリットといえる。また、こもの体験は季節を変えて同じ場所で新しい発見を繰り返し見つけることができる活動としてあげていた。

出張授業は、ふれあいや昆虫採集など「生きたもの」を重視した活動を続けている。館では、学校の授業の代わりをするのではなく支援する立場であるという姿勢を示すため、学校のカリキュラムに合わせたプログラムではなく基本のプログラムから学校の要望を調整するというスタンスをとっている。今後の展開としては、これまで資料館に積極的にかかわっていた先生方の世代交代の対応が課題となり、教員との繋がりを図るため研修会などの重要性あげている。また、需要が多くなると専門員による直接対応が難しくなり、マンパワー不足の問題も大きい。システムの構築、資料貸出や協力体制の充実などの課題もある。



写真 1. 平田慎一郎氏 / 2. 坂本昇氏

## 事例報告 2：きしわだ自然資料館の場合

報告者：平田慎一郎（きしわだ自然資料館学芸員）

きしわだ自然資料館の事例では、平田慎一郎氏（きしわだ自然資料館学芸員）からこれまでのアウトリーチ活動の経緯と人気の拡大について報告を受けた。アウトリーチ活動は、総合的な学習の対応、見学者の伸び悩み、知名度の向上、教育委員会との連携不足、他館などの交流など様々な問題や動機をもって資料館が主体となって取り組みを始めた。アクセスの問題などもあったため、身近な自然をテーマにしたWSからスタートした。

アウトリーチ活動の拡大は、2004年に誕生した「チリメンモンスター」というプログラムがきっかけである。チリメンモンスター（略称「チリモン」）は、ちりめんじゃこ（シラス干し）に混じるじゃこ以外の生き物に対する名称で、館と友の会が共同でチリモンを探すというゲーム感覚で楽しめるWSを展開した。2009年に関連本が出版され、マスコミにも取り上げられるようになり出前講座の依頼が大幅に増加したという。チリモンは、文化・教育施設だけでなく水産課と連携するなど異業種とコラボして地球環境、地域環境、家庭環境など様々な分野と関われるメリットをもつことができた。そして「チリモンといえば岸和田の資料館」といわれるほど館の知名度アップにも成功した。チリモンの人気によって海以外のテーマへの波及効果、新しい施設・団体の繋がりなど様々な効果を生んでいる。そのなかで次のような課題もあげている。（1）人気の出前講座の

ため学芸員不在の時間が多くなる（2）海分野への偏り（3）調査研究等の学芸業務の時間縮小（4）出前の回数＝資料館の入館者数増ではないこと（5）派遣先のエリア問題（市内OK・市外NG？）

課題については、指導ができる人材育成や指導者たちへのサポート教材の充実、コーディネーターの育成などを検討している。また、自主的な取り組みを促し、抜本的に出前講座の回数を減らすため、WS以外に研修会、人形劇、手引書やチリモン人形の作成、貸し出しキット、模型貸し出しなども実践しているが（予定も含む）、WSの申し込みは依然多い傾向にあるという。



写真 3. 剣持悟氏（中央） / 4. ディスカッション

話題提供：介助犬のひろばで大切にしている視点

報告者：剣持悟（川村義肢株式会社・日本リハビリテーション工学協会理事）

自然史系の事例報告を受けて、剣持悟氏（川村義肢株式会社・日本リハビリテーション工学協会理事）から企業が実施したアウトリーチ活動について話題提供を受けた。アウトリーチの目的は、アクセシビリティ（利用しやすさ）の確保であり、来ることができない人に近づくためにも異業種の連携強化が求められている。福祉系と連携したアウトリーチ活動は（1）当事者の考え方を大切にする、情報源・パートナーは専門分野の施設・団体に協力を依頼（2）交通アクセスの検証（3）情報の保証（紙ベースの資料を用意）（4）会場レイアウトのシミュレーション（5）場の提供・会の設定（調査のアプローチ方法、プロセスを重視）などの工夫をあげている。

まとめにかえて

事例報告は「イタコン」の愛称で親しまれている伊丹市昆虫館、「チリモン」をヒットさせたきしわだ自然資料館が行った。文化財出身の私にとって、あまり他分野の事例を聞く機会がないものの、この2館の名前と「イタコン」「チリモン」の存在は何かしらのルートや話題で知っており関西のミュージアム業界でも注目された施設だろう。それぞれ得意分野やキラーコンテンツを武器にして、館の姿勢・施設の魅力を館外で発信するアウトリーチ活動を成功させ

た事例であった。継続すること、館に来てもらうこと、学芸員の人員不足、研究時間の縮小など、アウトリーチが成功しても課題は尽きることはないが、ホンモノに触れたウキウキ・ワクワク・ハラハラした気持ちは、見て触って感じた記憶とともに参加者の生活の中でリンクする発見も生まれ、体験した時間以上に楽しめる仕掛けが続くように思う。また、話題提供にあった企業と文化施設の共同事業は、実際に参加することで「知る機会」を持つことができた。お互い専門性の高い業種であるものの、ノウハウを提供しあう、相談しあうことから始め、双方のフィールドで存在しなかった可能性を見出せるという魅力を感じた。なにより資料館との連携事業は、人と人の縁からスタートしたものだという。アンテナを張り続けること、ネットワークを広く持つこと、フットワークを軽くする、気負いすぎないこと、新しいものを受け入れる寛容さを持つこと。そして「もっと良くしたい」という強い気持ちがどの分野にも共通するアウトリーチ活動の原動力であるといえるだろう。



## 第2部 第2章 アウトリーチとテーマとした学芸員研修 実践報告

### 大東市立公民館での実践

本実践は、学芸員大畑博嗣と市民学芸員竹元智子・中村義之によって行われた。その内容について大畑が報告する。

### 大東市商工会議所 20 周年記念イベントでの実践

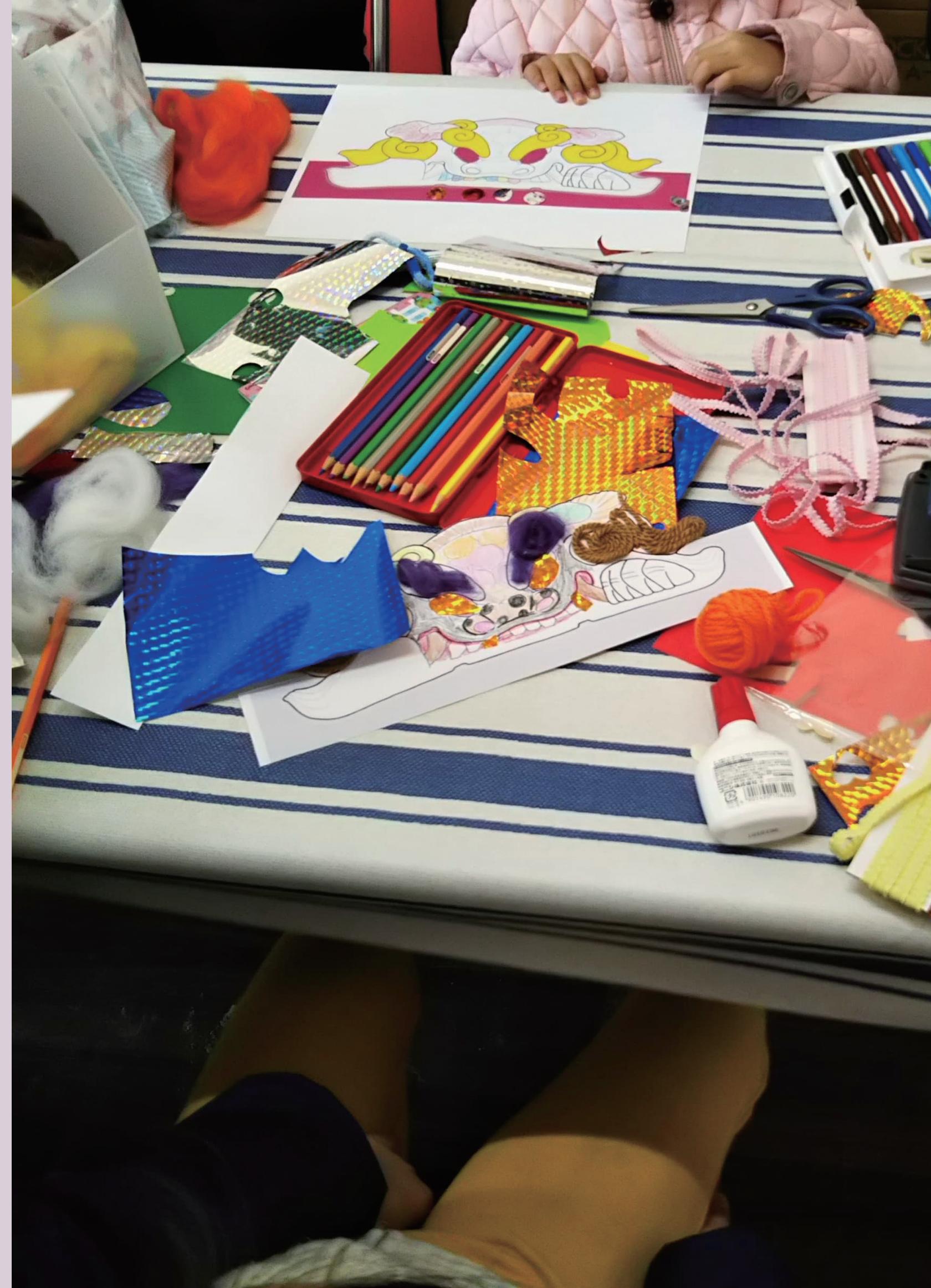
本実践は、明星金属工業株式会社の協力により実現し、商工会議所第一・第二工業部会の実施する「こどもものづくりー15のワークショップー」に加えていただいた。市民学芸員竹元・中村が実施、学芸員北村美香、外部より日高昭子がサポートにあたった。

### 大東ピクニックでの実践

本実践は、アクティブスクエア大東という施設からの要請を受け、実現したものである。アウトリーチの研修を受けて日高昭子が企画・実施した。

### れきみんカーニバルでの実践

前述のワークショップをさらに改良して実施した他、新たに「織物」でのワークショップが検討できないかと実践したものである。実践をおこなった北村美香より報告する。



## 第2部 第2章 実践 だんじりプラバンをつくろう！

大畑 博嗣

大東市立歴史民俗資料館

実践日：10月28日（日） 14:00～16:00  
実践場所：大東市立公民館

### 1. 経緯

毎年10月に大東市内の各町でだんじりが曳行されることから、それに合わせて、10月から12月頃にかけて、大東市立生涯学習センターアクロス・大東市立公民館・大東市立歴史民俗資料館の3館合同で「大東のだんじりフェス」という連携事業を行っている。また、2018年10月6日（土）から12月2日（日）まで、資料館において秋季展示「寝屋川流域の村—『東家文書』から見る諸福村の歴史—」が開催されていることもあり、連携事業と展示関連事業の一環として、10月28日（日）に「だんじりプラ板をつくろう！！」を大東市立公民館に於いて開催し、3館合同でだんじりのワークショップを開催することとなった。

### 2. 実践報告

今回は、昨年度に実施した「れきみんカーニバル」で行った、龍間（経寺）地区より寄贈を受けただんじり彫物のトレース図を使ったプラ板を制作するワークショップを開催した。だんじりと装飾として施された彫物について説明を行ったあと、「龍」と「獅噛」の2種類の図柄が印刷されたプラ板をから参加者にどちらかを選んでもらい、色鉛筆で色を塗ってもらったあと、穴開けパンチを使い、根付け紐を通

す穴を開け、オープントスターで熱を加えて収縮・硬化後、根付け紐を取り付けて完成させた。

### 3. 成果と課題

今回、だんじりと彫物の説明を行う上で、写真や実物を用意しなかったために、参加者のだんじりの理解を深められず、プラ板の制作がメインという形になってしまった。また、事前申込み制であったが、申込み者が少なく、当日会場近くでチラシを配布し参加者を募るなど広報活動を行ったが、なかなか参加者が集まらなかった。

次回以降では、事業の内容と共に、事業を行う際の広報や周知方法の検討が必要となった。



写真 1. ワークショップ風景 2. だんじりプラバン



## 第2部 第2章

### 実践 子どもものづくりワークショップ「プラバンづくり」

実践日 :11月11日(日) 9:30～16:00

実践場所：大東市立市民会館

#### 1. 経緯

大東市立公民館における実践をふまえ、11月11日(日)に大東商工会議所のイベントにおいてさらなる改良を加え、ワークショップを実施した。

同イベントへの参加は、昨年度の当館での実践(『進化系アーカイブと旅するミュージアム平成29年度事業報告書』P59参照)を見学していた市内のメーカー、明星金属工業株式会社上田幸司氏からの提案を受けて、実現した。

同社では、大東商工会議所創立20周年記念事業におけるワークショップについて、その内容を検討していた際、昨年度の実践を思い出し、当館の方へ相談にこられた。

これまで当館とは「だんじり」をキーワードに、調査や活用の方法について試行を繰り返していたため、その取り組みの様子を周知するためにも、この提案に応じることとなった。

#### 2. 実践報告

昨年度の当館における「だんじりプラバン」、大東市立公民館(前項)、本実践でも市民学芸員竹元智子・中村義之がこれを担った。多くの参加者が見込まれたため、当館学芸員北村美香、そして「大東ピクニック」での実践を行う担

当者日高昭子が補助として加わった。また、金型や3次元計測機等の説明については、明星金属工業株式会社上田幸司氏・阪本節治氏にサポートしていただいた。

大東市立公民館での実践では、「だんじり」といった実物資料や「パネル」などの解説資料はなく、単にだんじりの彫物をモチーフとしたプラバンをつくったという理解にしか至らなかったという反省があった。そこで、本実践では、実物資料の展示と解説パネルを設置することとした。

作業テーブルの中央に、プラバンのモチーフにもなっているだんじりの彫物を設置し、プラバンに色をぬる作業をしながら、実物を見られるようにした。パネルは、立ったまま多くの人が見るという想定のもと、写真を大きくし、文字は極力減らした解説を設置した。パネルや移動型展示ケースは昨年度の事業で制作したものを使用した。





写真 1. 会場風景 2. ワークショップ 3. 主催者発行のチラシ

### 3. 成果と課題

「ミュージアム」を目指してくる来館者とは異なり、大東商工会議所の主催するイベントに集ったさまざまな層の方にだんじりプラバンを体験してもらうことができました。

館外のこのような場において、実物資料や資料館、あるいは明星金属工業株式会社との取り組みや当館の活動について周知できたのは、意義深いものと考えます。

しかし一方で、だんじりプラバンと展示との接続が悪く、プラバンを体験した183名のうち、何人までが実物資料や解説パネルを見ることができたのか疑問が残ります。

スタッフ側から参加者に働きかける際には有効な展示ではあるが、参加者も多く、解説などできる状況ではなく、「プラバンづくり」に終始してしまいました。

今後の課題として、ワークシートなど、持ち帰った後からでも、理解を深められる道具が必要だと考える。

大東商工会議所 創立20周年記念 <b>二十歳の感謝まつり</b> イベントプログラム 10:00～16:00 イベント内容や時間は都合により変更される場合があります。	
部会等	催し物
建設部会	職人技披露 クレーンを使用した足場組立実演や木軸ハウス施工 本造軸組ハウス及び電気・設備等の職種体験施工 建築物耐震診断・耐震改修に係る補助制度パネル展示 【大東市】
第一、第二工業部会	こどものづくりワークショップ 未来のUFOキャッチャー、エコキャンドル作り、キーホルダー作り、3Dクレーンゲーム、紙すきと押し花、容器のフック組み体験、キフトボックス作り体験、プラスチック材の仕上げ体験、缶バッジの製作体験、ハード形などのプチプチ、他
流通・卸売部会	スロバキアワイン試飲販売 トルコ料理(キッチンカー)販売 ハーレー(カスタムバイク)展示 アメ車展示 朝日電器館による物品販売
商業部会	トップワールド 移動スーパー(刺身・寿司・惣菜・お肉・果物など)販売 JA お米販売 大東市造園園芸緑化組合 樹木販売 子供を対象とした「高さ4mのスライダ―」設置
環境衛生部会	マグロの解体ショー 12:00～13:00 マグロ試食(400食) 11:00～ 寿司試食(400食) 11:00～ そば試食(限定400食) 12:00～ 非常食(アルファ米)配布(限定150食) 12:00～ 飲物試飲(ビール・お茶・ジュース) 11:00～
金融・サービス部会	ロボットプログラミング教室(大東楽器館) ①10:00～ ②12:30～ ③14:30～ (各90分) 子ども向けネイル体験(chura～美ら～、Ciel、La*fleur) キッズマネーアカデミー(輝りぞな銀行) ①10:00～ ②13:00～ ③15:00～ (各60分) RPG風クイズゲーム(NIT西日本)
青年部	ウォークラリー(周辺に潜むユニークな犯人探し)
女性会	フライドポテト 先着500人前
ようこそ会	薄茶の振る舞い(責任者 糸川宗伸)
大東市	大東の観光(大東市観光ボランティアガイド やまびこ) 三好産業PR
ボランティア	ギター演奏(トバース) 13:00～13:30 ハーモニカ演奏(大東ハーモニカアンサンブル) 13:30～14:00

\*各出張の場所はイベント当日配布のプログラムをご覧ください。\*試飲、試食、販売等は、数に限りがあります。あらかじめご了承ください。

## 第2部 第2章 実践 だんじりおめんづくり

日高 昭子

滋賀県平和祈念館

実施日：2月16日（土）10:00～15:00  
実施場所：アクティブ・スクウェア・大東

トなどの材料を用意し、参加者が自由に表現できるようにした。また、制作の補助としてスタッフを配置した。

### 1. ねらい

だんじりの屋根を飾る獅子や龍は、神獣としての物語があり、その彫刻の豪華さ、力強さは人々の目をひく。ここでは、大屋根の正面に位置する獅嚙に注目し、その物語と実物の観察を通して、参加者が自分なりの獅嚙を表現することで、だんじりの魅力や歴史に触れる機会とした。

これまでの「だんじり」をキーワードに進めてきた調査や活用の蓄積を参考に、実施にむけて議論を重ねた。また当館で所蔵している龍間地域の実物のだんじりの獅嚙、だんじりと関連する相撲の解説パネルを展示し、おめんづくりの前後に歴史を深める機会を提供した。

### 2. 実施報告

会場となったアクティブ・スクウェア・大東は、地域活動の場として旧小学校校舎を活用した宿泊も可能な施設である。1階出入口付近の人通りの多い場所での実施だったが、相撲の関心が比較的高かったため、声かけをしてだんじりのおめんづくりへと促した。

おめんづくりは、実物をトレースした獅嚙を印刷した紙をもとに、制作する。色ペンや色鉛筆や毛糸や羊毛フェル





写真 1. 会場の様子 2. ワークショップ 3. 主催者発行のチラシ

### 3. 成果と課題

今回は、未就学児から小学生の児童の合計 38 名に参加していただいた。

特徴としては、ひとつめに未就学児が参加しやすいということがある。これは、スタッフが補助として入ることで制作環境を整えることができたからと考えている。

ふたつめは、おめんづくりをとおして、実物資料やだんじり模型を観察するきっかけとなり、だんじりへの親しみや理解を深められたということである。また、実物資料やだんじり模型を観察だけでなく、それらと共に撮影する光景もみられた。これらを活かして、だんじりの歴史の理解を深める働きかけを考えていきたい。

しかしながら、ねらいとしてあげた神獣の物語については、口頭の説明だけでは十分に伝えきれなかったという課題が残った。神獣を想像することが難しく、結果として当初のねらいにあげた神獣の物語への興味や理解を深めるところまで至らなかった。

あともまる!! たべる!!  
まるごとたのしみ♪  
どなたでも参加できます

# 大東ピクニック

2019年2月16日(土) 10:00-15:00

世界で一番住みたい街をめざして!!

食・健康・体験  
「ちやんこ」  
「野菜取分け」  
「納豆販売」  
「いくカフェ」  
「自転車マナー講習」  
「旅するミュージアム」  
「健康イベント」  
「サッカー体験」  
「大東ちゃんこログ」

「現像力士に会える!」  
「朝読書発表会」

大東での体験できない「大東スタイル」を体験したいと考えています。  
「大東の歴史」「大東の文化」「大東の未来」をテーマに、大東の魅力を伝えるイベントです。  
どこにもないアクティブなプログラムを大東ピクニックで、じっくり体験してください。

会場 アクティブ・スクウェア・大東 0570-001-962  
お問い合わせ先 大東市深野3丁目28-3 info@daito-club.com

DAITO SQUARE PARK  
since 1982

## 第2部 第2章

### 布の不思議探しと布づくり

北村 美香

大東市立歴史民俗資料館

実施日：3月2日（土）13：00～16：00

① 13：35～13：45 ② 14：15～14：45

③ 15：15～15：45

実施場所：大東市立歴史とスポーツふれあいセンター

#### 1. 経緯

今年度より本事業の一環で、市民学芸員と河内木綿についての調査研究に取り組んでいる。調査研究の成果は、次年度の企画展示へと活かす予定であるため、本プログラムは継続的な実施を念頭に、一番身近な木綿製品である「布」に焦点を当てた内容で企画した。

日常的に目にする機会の多い「布」であるが、じっくり観察する機会は少ない。そこで本プログラムでは、「見る」「触れる」「作る」の3つの作業から、布の構成要素について気付き、日常的に身につけている衣服などの綿製品について、先人の布利用もふまえながら興味関心を持つきっかけづくりとなることを目指した。

#### 2. 実施報告

実施当日は、一回の定員を10名とし、実施開始時間もあらかじめ設定したことで、参加者がじっくりと時間をかけて観察できるようにとの配慮をした。まずは、古布でできた布団を実際に手に取って肉眼で観察し、その後携帯電話用ルーペを使用して拡大して再度観察することで、これ

まで気がつかなかったような織り方に気がつく子どもたちが多かった。また、古布の継ぎはぎや擦り切れて薄くなっていることに気づく子どもたちもいたため、布利用について現在との比較などにも会話が広がることもあった。これらの観察結果は、一枚のカードにまとめ、それぞれの学習記録としてまとめてもらった。

次に、観察した経験をもとに、実際に織る作業をしてもらった。時間的な制約もあったため、あらかじめ縦糸は張ったものを使用してもらうことにした。観察した平織りをまねて数段織ってもらったが、「こんなに手間がかかるとは思わなかった」「服を作る分の布を織ると思うと、昔の人は大変だったなあ」などの感想が得られた。今回はあえて織りの作品を完成させず、作成したカードと一緒に織り機を持ち帰ってもらうことで、自宅で織りの続きをしながら観察したことを振り返るようにして終了した。

#### 3. 今後への展望

今回は、イベントの中のアクティビティの一つとして実施であったため、実際の織り機を見てもらうことや作品として完成させることは出来なかった。今後、企画展の関連イベントとして実施する際は、構成要素を精査し、さらに学びが深まるような工夫をすることでプログラムのブラッシュアップにもつながる。引き続きよりよい学びの機会創出に向けて努力していきたい。



1

写真 1. 布団を観察する参加者 2. ルーペで拡大した布 3. 織る体験



2



3

## 第3部 展示とシンポジウム





第3部は本事業でおこなった活動をひろく周知する目的で実施した2つの事業について紹介する。

第1章では、奈良大学博物館で実施した企画展「地域のくらしとまつりーよみがえれ！だんじりの龍ー」について報告する。

第2章では、「河内木綿」をテーマとしたアウトリーチを実施していくために、活動報告を兼ねたシンポジウムを企画した。

## 第3部 第1章

### 企画展1「地域のくらしとまつり よみがえれ！だんじりの龍」

期間：2018年7月7日（土）～8月31日（金）開館日数合計42日

場所：奈良大学博物館 来館者数：1,260名

坂井 秀弥 小山田 宏一

奈良大学博物館

奈良大学博物館

#### ■経過・主旨

奈良大学博物館では、2017年に大東市立歴史民俗資料館で開催した「TATUMAーくらしとまつりー」を、今回、奈良大学博物館で平成30年度企画展1「地域のくらしとまつり よみがえれ！だんじりの龍」として紹介した。

展示の主旨は、解体された大阪府大東市龍間地区のだんじりの彫り物（龍）、関連する古文書などを地域のくらしとまつりを象徴するものとして、保存・活用する取り組みを紹介するとともに、伝統的で個性的なまつりと地場産業をつうじて、龍間の魅力を再発見する場を提供することである。

#### ■展示

展示は、第1章「だんじりのあった村」、第2章「だんじりの幕・彫り物」、第3章「古文書をひもとく」の3部構成で、ほかに龍間地区の史跡や文化財をめぐる「龍のしっぽをさがして」を放映する映像コーナー、だんじり小屋とありし日のだんじりの写真を背景にして来館記念写真がとれるフォトスポットを設置した。進化系アーカイブと旅するミュージアム事業の取り組みは、パネル展示で紹介した。

第1章「だんじりのあった村」では、だんじりが建造された明治時代を中心に、だんじりの曳行を支えた村の暮らし、とくに生駒山山間部という自然環境をいかした石材業や製氷業を取り上げた。第2章「だんじりの幕・彫り物」では、車板の龍、榎合の麒麟などの彫り物、虹梁や大屋根

と小屋根を間仕切る部材、屋根下を装飾する鳳凰や麒麟を刺繍した飾り幕などを紹介した。また奈良大学が協力した文化財害虫の殺虫処理についてはパネル展示をした。第3章「古文書をひもとく」では、だんじりとともに保存されていた古文書から、龍間（経寺）地区のだんじりの歴史や青年団の活動を紹介した。

#### ■見学

7月8日（日）、7月29日（日）、8月26日（日）のオープンキャンパスで、高校生と保護者あわせて280名が来館した。9月26日には、タイ、中国、カンボジア、フィリピン、マレーシアなど11カ国の大学教職員が参加したアジア太平洋大学交流機構（UMAP）の使節団が学内施設の一環として本展示を見学した。

奈良大学博物館 平成30年度企画展Ⅰ「地域のくらしとまつり よみがえれ! だんじりの龍」 出展リスト

No	資料名	員数	時代・年代・世紀	備考
第1章 だんじりのあった村				
1	テッポウノミ	1点	大正～昭和	大東市指定文化財
2	ノミ	1点	大正～昭和	大東市指定文化財
3	ソコウチノミ	1点	大正～昭和	大東市指定文化財
4	セツウ	1点	大正～昭和	大東市指定文化財
5	ゲンノウ	1点	大正～昭和	大東市指定文化財
6	ビシャン	1点	大正～昭和	大東市指定文化財
7	ハビシャン	1点	大正～昭和	大東市指定文化財
8	タタキ	1点	大正～昭和	大東市指定文化財
9	フイゴ	1点	大正～昭和	大東市指定文化財
10	「石工百景」	1巻	平成6年(1994)	大東市指定文化財/樋口清春作
11	絵馬「鎮火お礼参りの図」(写真)	1点	明治16年(1883)	
12	「龍間天然氷製造の図」(写真)	1点	平成4年(1992)	原本:樋口清春作
13	天然氷記念灯籠(写真)	1点	昭和5年(1930)	
第2章 だんじりの幕・彫り物				
14	送り状	1点	明治36年(1903)	
15	飾り幕(鳳凰)	1点	明治36年(1903)	
16	飾り幕(獅子)	1点	明治36年(1903)	
17	だんじり部材(虹梁)	1点	明治12年(1879)	木村喜八作
18	彫り物(花戸)	1点	明治12年(1879)	小松源助・延治郎作
19	彫り物(花戸)	1点	明治12年(1879)	小松源助・延治郎作
20	彫り物(車板「龍」)	1点	明治12年(1879)	小松源助・延治郎作
21	彫り物(鬼板「獅嚙」)	1点	明治12年(1879)	小松源助・延治郎作
22	彫り物(桝合「麒麟」)	1点	明治12年(1879)	小松源助・延治郎作
23	彫り物(懸魚「鷲と猿」)	1点	明治12年(1879)	小松源助・延治郎作
第3章 古文書をひもとく				
24	箱	1点		
25	獅子舞建立帳	1冊	文政13年(1830)	
26	太鼓張替寄進帳	1冊	文久元年(1860)	
27	地車幕銀寄帳	1冊	文久3年(1863)	
28	地車幕銀寄帳	1冊	元治元年(1864)	
29	楽車に付き入用記	1冊	明治13年(1880)	
30	楽車蔵新築に付入費計算簿	1冊	明治15年(1882)	
31	地車入用帳	1冊	明治16年(1883)	
32	地車蔵に付入用帳	1冊	明治16年(1883)	
33	諸事入用簿	1冊	明治3年(1870)	
34	御花受取簿	1冊	明治14年(1881)	
35	勘定簿	1冊	明治25年(1892)	
36	墓寄帳	1冊	明治31年(1898)	
37	御花帳	1冊	大正4年(1915)	
38	立太子礼奉紀念	1冊	大正5年(1916)	
39	立太子礼奉祝	1冊	大正5年(1916)	

※便宜上、展示品に番号を付したが、展示替えや陳列状況により、陳列順は必ずしも番号通りではない。  
 ※所蔵は、1～10は大東市立歴史民俗資料館、14～39は龍間(経寺地区)より大東市立歴史民俗資料館に寄贈を受けたものである。

# 地域のくらしとまつり よみがえれ！ だんじりの龍



奈良から生駒山を越えた大東市龍間で、明治時代の初めの「だんじり」が解体されることになり、大東市立歴史民俗資料館が、市民学芸員や地元企業とタッグを組み、「だんじり」の彫り物の「龍」や関連資料を保存処理しました。奈良大学および奈良大学博物館は、保存処理やデータベースの構築などに協力しました。今、「だんじり」の「龍」はみごとによみがえり、地元のほかに出張展示などあちこちに放しています。今回の展示は、龍間の「だんじり」の彫り物である「龍」や福などの付属品、関連する古文書の保存と活用の取り組みなどを紹介します。



写真：龍間のだんじりの彫り物

2018.7/7 sat~9/1 sat

主催/ 奈良大学博物館・大東市立歴史民俗資料館・進化系アーカイブと旅するミュージアム実行委員会  
問合せ 進化系アーカイブと旅するミュージアム実行委員会  
大東市大東市野崎3-6-1大東市立歴史とスポーツふれあいセンター2F大東市立歴史民俗資料館 TEL/ 072-876-7011

平成30年度 文化庁 地域の秋となる美術館・歴史博物館支援事業

開館時間 平日/ 9:00~16:30 土曜日/ 9:00~12:00  
休館日 日曜日・祝日 8/13(月)~8/18(土)は臨時休館  
特別開館日 7/8(土)・7/29(土)・8/26(土) 9:00~15:00  
入館料 無料



**奈良大学博物館** NARA UNIVERSITY MUSEUM  
〒631-8502 奈良県奈良市山崎町1500  
TEL/ 0742-44-1251 FAX/ 0742-41-0650 URL/ <http://www.nara-u.ac.jp/museum/>



2. アジア太平洋大学交流機構使節団

1. チラシ（表）



3. 展示風景



4. 第1章



5. 第1章 / 石工の道具



6. 第1章 / 石工の鍛冶道具・フイゴ



7. 第2章 / 飾り幕 (鳳凰)



8. 第2章 / 龍の彫り物 (車板)



9. 第3章 / 古文書



10. フォトスポット



11. 映像コーナー



12. パネル展示 / 進化系アーカイブと旅するミュージアム事業

## 第3部 第2章

### 公開講座 + 市民学芸員木綿活動報告会

#### 「織りたい!!—大東の河内木綿活動—」

期間：2019年3月3日(日) 14:00 - 16:30

場所：大東市立歴史とスポーツふれあいセンター 参加者数：34名

森井 綾乃

大東市立歴史民俗資料館

#### 1. 概要

平成30年度進化系アーカイブと旅するミュージアム事業において、大東市立歴史民俗資料館の専門スタッフである市民学芸員と共に河内木綿をテーマとした様々な取り組みを進めてきた。そうした取り組みの1つとして、木綿の種を1年かけて育て、収穫した。そして、今後収穫した木綿を用いて織ることを目指していくための事前学習として、外部講師を招き講演会を実施した。

また、市民学芸員とともに行った1年間の活動成果を発表する場を設け、『公開講座 + 市民学芸員木綿活動報告「織りたい!!—大東の河内木綿活動—」』を実施した。募集定員が30名のところ、当日は34名の参加があった。イベントの詳細な内容について以下に報告する。

#### 2. 公開講座 + 市民学芸員木綿活動報告「織りたい!!—大東の河内木綿活動—」

##### (1) 「下機とその織物文化」

講師：植村 和代(帝塚山大学名誉教授)

初めに、植村和代氏から「下機とその織物文化」というテーマの講演があった。本事業では今後河内木綿についてさらに知見を深めるため、織ることに取り組んでいきたいと考えており、そのためには機が必要である。織るための機という道具には様々な種類があるが、機を設置し作業するスペースを確保することが困難な当館において、どういった

機を用いるのがよいかということは難しい問題だった。しかし、河内木綿を織る際に用いられていたとされる下機(天秤腰機)という種類の機を使用することを決めた。そこで、機織り作業を始める前の事前学習として、下機の特徴や織物の歴史にまつわる内容の講演をお願いした。下機とは、腰機の一つであり、経糸の端を取り付けた棒を腰に括り付けて引っ張ることでテンションをかける織機である。講演から、地機と腰機それぞれが用いられる地域の違いやその他の機についても知ることが出来た。

また、織物の起源や発展の過程についてお話があり、合わせてスプラング技法と腰機の実演を見ることが出来たため、逐次操作と一括操作についてそれらの仕組みと生産性の差がよく理解できた。

##### (2) 「民具と身体—多視点で民具を想像する可能性—」

講師：安藤 隆一郎(身体0ベース運用法)

次に、身体0ベース運用法の安藤隆一郎氏による「民具と身体—多視点で民具を想像する可能性—」というテーマの講演があった。身体0ベース運用法とは、「身体」と「もの」との関わりから生まれる身体を「ものづくりの」視点から見直すことにより、人間が本来持つ感覚機能を読み解いていく活動である。(本イベント広報チラシ紹介文より)

講演の中で、身体0ベース運用法としてこれまで行われてきた、「ものを+aする」「場所を変える」「リズムを意



チラシ表面



チラシ裏面

識する」といった大きく分けて3種類の試みについて紹介があった。

本事業では今後、織るためにさまざまな道具を使うことを実際に行っていく。そのなかで、ただ単純に道具を使えるようになるだけでなく、道具の形と作業の結びつきや利便性、身体の使い方など、様々な視点から「下機」や「織ること」を捉えられるようになりたいと考えている。

そうした多様な視点を持つきっかけづくりとして、安藤氏に民具を用いた様々な取り組みを紹介していただいた。

### (3) 市民学芸員による活動報告

報告者：竹元 智子（市民学芸員）、中村 義之（市民学芸員）、水永 八十生（市民学芸員）、平尾 寿美子（市民学芸員）、森井綾乃

市民学芸員とともに行った河内木綿に関するそれぞれの取り組みについて、活動に参加した市民学芸員より活動報告を行った。まず初めに、今年度の活動の趣旨説明や経緯といった全体の概要を筆者が行った。続いて、1期生の中村義之氏から市民学芸員活動そのものについての説明として、これまでに市民学芸員が取り組んだ展示等の紹介が行われた。次に、同じく1期生の水永八十生氏から河内木綿に関係する古文書の翻刻作業や、デジタルアーカイブ化に向けた撮影作業等に取り組んだ「古文書探し隊」の活動に関する報告が行われた。続いて、4期生の平尾寿美子氏より

り木綿関係の民俗資料の整理やクリーニング作業、デジタルアーカイブ化に向けた撮影作業等に取り組んだ「収蔵庫整理し隊」の活動に関する報告が行われた。最後に、3期生の竹元智子氏より木綿を栽培し収穫した木綿を使って糸紡ぎの練習等を行った「河内木綿知り隊・作り隊」の活動報告が行われた。

### (4) ワークショップ「織る」

講師：森井綾乃

簡単な材料を用いて「平織り」を行うワークショップを実施した。今回のイベントは一般市民の参加も見受けられたこともあり、「織る」ということについて基本的なイメージをやすくするためにワークショップの時間を取り入れることを試みた。材料としては、パネルやクリップ、割りばし、ストロー、マスキングテープを用いた。経糸を固定せずに平織りを行うところから始め、縦糸を張って固定し、クリップと割り箸で綜絢の役割を持たせる装置を作るなど、徐々に材料を足して平織りの状況を変えていき、織りやすさを比べることを目的とした。作業には5つのパターンがあり、それぞれ約2分ずつ平織りを行う時間を設けたが、実際に行ってみてそれぞれの作業時間をもう少し長く設定の方がよかったと反省した。最後に、今後大東市で使っていきたいと考えている下機（天秤腰機）について紹介を行った。



講演「下機とその織物文化」



講演「民具と身体—多視点で民具を想像する可能性—」



報告会「平成30年度河内木綿に関する市民学芸員活動の報告」



ワークショップ「織る」



# 進化系アーカイブ



## まとめ

「進化系アーカイブと旅するミュージアム」は、3つの事業に分かれる。

第一は、「進化系アーカイブ事業」で、市民学芸員とつくる収蔵庫事業である。今年度のキーワードである「河内木綿」を中心に、関連する民俗資料のクリーニング、資料撮影、配架作業を進めるとともに、講義・見学などの学習を行なった。また、所蔵している古文書から「木綿」に関する資料を抽出し、整理を行なうとともに翻刻作業を進め、アーカイブ化に向けた写真作業を実施した。さらに、「近赤外線カメラ」による各種資料の撮影・観察によって様々な情報を得ることがわかり、その可能性が明らかとなった。そして、「ものづくり体験」を行なうことによって、資料の製作過程や用途などの視点をもつことを知り得た。

第二は、「旅するミュージアム事業」で、「河内木綿」をアウトリーチで届けることで、技術的な理解が深まるとともに、その行程を経験することを主題とした。まず、河内木綿の伝承活動を行っている資料館などに行き、学ぶことから始めた。次に、木綿を育て、それを利用した綿打ちと糸紡ぎ作業を経験した。そして、河内だけでなく、丹波や松阪、赤穂などの木綿に関する活動事例を知ることができ、アウトリーチ活動についての現状と課題を整理することができた。さらに、アウトリーチを広げるための学芸員研修を行なった。研修会では、歴史民俗資料と自然史資料についてそれぞれ事例報告がされ、ディスカッションが実施された。市民への実践としては、「だんじりプラバンづくり」「だんじりおめんづくり」を行い、多くの市民の参加を得た。

第三は、「展示とシンポジウム事業」である。展示は、奈良大学博物館において「地域のくらしとまつり よみがえれ！だんじりの籠」として開催され、大東市龍間地区のだんじりの彫物、古文書から地域のくらしとまつりを紹介するとともに、地域の魅力を再発見する場の提供となった。シンポジウムとして、「織りたい！—大東の河内木綿活動—」のテーマで外部講師による講演会と市民学芸員による木綿活動報告、ワークショップを実施した。

博物館の役割である収集・整理・調査・研究のあと、それらの情報をどのようにして記録・保存するのがアーカイブである。収蔵庫に眠っている資料に再び命を吹き込み、再生させ、活躍の場を準備する過程ともいえる。「河内木綿」をキーワードに、クリーニングから撮影、再整理、そして観察や学習を市民とともに行なったことに大きな価値がある。



そして、それらの成果を外部に発信することがアウトリーチで、展示・公開・教育・普及・活用などの視点が重要である。「河内木綿」の技術や文化の伝承、種まきから収穫、綿打ちから糸紡ぎまでの過程を経験することによって、資料の材質・製作・用途など真の資料的価値を知ることができ、市民に届けることができる。

今後は、これらの視点と経験を活かして、資料の価値を再発見し、アーカイブ化を図るとともに、市民に向けたアウトリーチ化を進めることによって、資料の活用を促進したい。

平成 31 年 3 月 31 日  
笠井敏光

旅  
する  
メモリア

< 謝辞 >

本事業の実施にあたり、下記の方々よりご協力を賜りました。記してお礼申し上げます。

機関・組織・個人（順不同）

池田治司氏（大阪商業大学）、李熙連伊氏（八尾市立歴史民俗資料館）、  
横山浩子氏（奈良県立民俗博物館）、溝邊悠介氏（奈良県立民俗博物館）、  
伊達仁美氏（京都造形芸術大学）、金城弥生氏、中藤容子氏、  
辻川智代氏（滋賀県立琵琶湖博物館）、井殿晴子氏（交野市社会教育課文化財係）、  
福岡佐江子氏（相楽木綿伝承館）、渡部佳代子氏（福知山市丹波生活衣館）、  
西尾真澄氏（丹波市地域おこし協力隊）、田中茂子氏（有限会社コットンライフ）、  
西口裕也氏（御絲織物株式会社）、臼井成生氏（臼井織布株式会社）、岡博美氏、  
井関京子氏（NPO 法人赤穂段通を伝承する会 花工房）、桃井香子氏（桃井ミュージアム）、  
木曾こころ氏（赤穂市立歴史博物館）、橋羽一恵氏（工房ひぐらし）、  
根来節子氏（赤穂段通生産者の会 弥生工房）、澤田絹子氏、岡村喜史氏（武蔵野大学）、  
佐藤優香（東京大学大学院情報学環）、駒井文恵氏（甲賀市教育委員会文化財保護課）、  
竜王真紀氏（山内エコクラブ）、福田博氏（吹田市立博物館ボランティアの会）、  
山内利秋氏（九州保健福祉大学）、坂本昇氏（伊丹市昆虫館）、  
平田慎一郎氏（きしわだ自然資料館）、剣持悟氏（川村義肢株式会社）、  
山本哲也氏（新潟県立歴史博物館）宮元正博氏（池田市立歴史民俗資料館）、  
西谷美紀氏（灸まん美術館）、上田幸司氏（明星金属工業株式会社）、  
阪本節治氏（明星金属工業株式会社）、大東市商工会議所、日高昭子氏（滋賀県平和祈念館）、  
植村和代氏（帝塚山大学）、安藤隆一郎氏（身体0ベース運用法）、アクティブスクエア大東、  
大東市立公民館

市民学芸員

安達昌代、今岡暁子、氏原稔夫、加茂伸子、岡田寧々、川人美智子、北野武司、栗山登志子、  
黒川喜和子、柴原妙子、柴田俊雄、田里孝子、為則照子、為則泰明、中下志津子、中村義之、  
林田恵子、檜垣一美、平尾和久、平尾寿美子、前田喜久子、水永八十生、辻村恵子、富増由  
起子、西川瑞代、樋口佳史、平嶋貞子、松本幸広、森川安生、吉武文恵、寺原千佳子、石田薫、  
伊藤幸美、大藺美貴子、柿木薫、栗山登志子、小泊繁美、竹元智子、富増由起子、中西昭治、  
中村義之、服部悦子、広田美和、松田薫、上野繁、岡島怜子、橋野喜美恵、

本事業は文化庁「平成30年度文化芸術振興費補助金（地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業）」を得て、実施したものです。

